

---

# とある虚弱な絶対空間

羽ポポ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある虚弱な絶対空間

### 【Nコード】

N4499V

### 【作者名】

羽ポポ

### 【あらすじ】

風紀委員でも、不思議な力を持つ無能力者でも、もちろん魔術師でもない。置き去りなにそれ食べれんの？ そんなレベル3の能力者、永末孝弘16歳、高校一年。彼が巻き起こす、というよりは巻き込まれる、不可思議な科学の物語。

「認識できない世界は存在しないに等しい。つまりは、存在すると認識した瞬間から、人は世界に存在を受け入れる。なら、逆説だ。存在すると認識されているモノを存在しないと認識し直すでしょう。そしたら、その存在は、どうなるかな？」

【とある虚弱の絶対空間 チョメ版】の改訂版ですね。まあ、大して変わってないですけど。

？  
とりあえず、こんな主人公はお嫌いですか？

男は強かった。はつきり言って、男は無敵だった。

「ウリヤうりやウリヤアー！」

「ぎゃー！ 悪魔あー！」 「オニイー！」 「あはは……なんだこれ、なんだよこれえーッ！」 「ば、化け物があーっ！」 「148円になりまぐげぶっ」

拳を振るうごとにあらゆるモノが飛んでいく。最後のは飛ばしちやいけない部類に入るような気がするが、それは無視だ。とりあえず、男は強かった。特殊な能力や、主人公だからというひいき目をなしにしても、男は強かった。

たとえ数百人が一度に彼を倒そうと向かってきたところで、彼はまるで意にかいさずにそれを叩き潰すことができた。数など、疲れを知らない彼のの前では無意味なモノでしかなかったのだ。そうして、あらかたのモノを破壊し終えたあと、男は決めポーズをとって言った。

正確には、身体を斜に構え、腕組みをして無駄に身体の重心を落とすという、どこかの漫画のジョスター家の誰かのような格好で立ったのだった。

「おいおい、それで終わりか？ やれやれだぜ」

男がそう言って首を振る。そして、戦いは終わった。

【Y o u W I N !】

とあるファミレスの一席。そこに、少年と少女が向かいあって座っていた。

「……という事で、俺はそれくらい強いから不良に絡まれたって撃退できる。さあ、これでどうだっ！」

「毎度毎度思うのですけど、貴方、本当に馬鹿ですわね」

ツインテールの少女、白井黒子が、呆れた、と言うような目で眼前の少年を見た。しかしながらその少年はまるでダメーヅを負ったそぶりを見せない。どころか、気障ったらしく前髪を掻き上げた。茶気を含んだ柔らかい亜麻色の髪が光を浴びてキラキラと光つ……たようには見えなかった。

どころか、どこかのギャグ属性を持った『主人公の親友』的ポジションの人間が持つマヌケささえ感じられた。

「ふっ。なんとでも言うのが良さ。いくらバカバカ言われた所で、頭の作りが他人と違う俺様は痛くも痒くもないぜ。むしろ快感だ」

「ようするに罵倒されて感じる変態ですね。分かりましたから、今すぐ死んで頂けます?」

「ハッハッハッ、黒子くん。ツンデレもほどほどにしないとダメだぜ。俺様みたいに特殊な性癖に理解のある人間でないと、その手の冗談は全く通じないからな」

「十割方本気なのですけれどね」

「ハッハッハッハッハッ! またまたあ、良く言うぜ!」

「オホホホホ。今すぐ殺して差し上げたいくらいですわ」

「ハッハッハッハッハッ!」

「オホホホホホホ」

「ハッハッハッハッハッ!」

「オホホホホホホ」

「ハアアッハッハッハッハッハアッ!」

「オーホホホホ……」

見た目だけは麗しい少年少女が高笑いしあう姿は、ひどく不気味だった。ていうかなにこれ。作者の頭を疑うワンシーンである。

周囲の席に座っていた客が迷惑そうな顔で彼等を眺め、店員に至っては青筋を浮かべながら微笑むという、無駄に高度な技術を披露してくれている。場はまさに、良い具合にカオスだった。

「テメエラはイカれたマリオネットかあ!」

と、その時、轟音と雷をもつて場を鎮圧する救世主が現れた。いやホント助かる。このままでは話が進まない所だった。もつと遣ってくれ、いや、その勢いでコイツラを片付けてくれても良い。と、ナレーターは思うが、それを口に出しはしない。なぜならあくまでもナレーターはナレーターだから。

そうこうしているうちに、何故か身体からプスプスと煙を上げている少女の方が口を開いた。少年の方が白目を向いて口から何か魂？ を吐き出している辺り、この救世主は少女には幾分か手加減をしていたようだ。

「おおお、お姉様っ。 なななぜ此処に？」

「ああんっ！？」

「ヒイツ……」

お姉様と呼ばれた救世主の射殺さんばかりの眼光に、白井黒子は息を飲んで後ずさる。

隣で魂カッコハテナマーク返しカッコを吐き出している存在が居るぶん、殺されるといふ恐怖がいつにも増してビンビンと迫ってきている……気がしなくもない。

我等が救世主は白井黒子の怯えたような眼差しを数秒間睨んでから、ハアと息をはき、答えた。何だか背後に疲労感というか苦労人の相が出ているように感じた。とナレーターはナレーションをする。

「偶然よ、偶然。それにしても」それから我等が救世主は未だに何かを吐き出し続ける少年を見て言った。「黒子が男子と居るなんて珍しいわね。これ、誰？」

白井黒子が慌てたようにそちらを見る。魂かっこ笑を吐き出す馬鹿っぽそうな少年が居た。黒子はああと言って咳ばらいをすると、忌ま忌ましそうに言った。

「ただの、馬鹿ですわ」

「へえ。じゃあ、アンタが噂の電撃姫か」

少年はチキンステーキにフォークを突き刺し、口に運びながら口を開いた。魂は体内に収納されたようで、もう肉眼では見えない。プスプスと焦げていた服も、いつの間にか元通りになっている。なんと恐るべきギャグ体質。これさえあれば瀕死の重傷も一発回復である。それがギャグシーンでさえあれば！

と、少年の言葉を聞いた白井黒子が誇らしげに口を開く。

「そうですね。常盤台のエース、学園都市レベル5の第三位、御坂美琴お姉様で……」

「ところかまわず電撃を撒き散らし、捕まったが最後『身も心も破壊しつくす風紀委員』をかたわらに侍らせて昼の街を闊歩するレベル5の悪魔。ははあ成る程。初対面の俺様に電撃を浴びせ掛けて謝りもしない所を見ると、噂もまんざら嘘じゃあないらしいぜ。この分だと中学二年という未だクソガキと呼べるような年のくせに男に見切りをつけてイタイケな同室の後輩の女子に手を出してるって噂も真実かも知れんな。ケツ、この百合馬鹿野郎め、そんな非生産的な事するから未婚男性が増えるんだバカヤローコノヤロー」

少年は言いながら、チキンステーキを咀嚼する。ついでにストロークをくわえてメロンソーダをちゅうちゅうと吸った。

我等が救世主の額にビシリと青筋が走る。そして、身体の周りにバチバチと電気がほとばしった。ちなみに、これは比喻表現ではない。電撃姫とは名ばかりのモノではなく、実際に電撃を操る中学生なのである。しかも、その電氣量が容易に人を死に至らしめられるのだ。言うなれば電氣人間、もとい、『ガツ ユ！ ザケルだー！』が素で出来る人なのだった。まあ、白目を向いてくれるかは分からないが。

そんな中で、白井黒子はどんどん場を支配していく剣呑な空気にあわあわと慌てていた。

こ、こんな風に慌てるのはわたくしではなく初春のポジションの

はずですのにいゝ。そんな事を思うが、残念ながらこの場には花飾りを頭に載せた変人、改め、友人は居ない。

ところで、こういう時にこんな話をするのは場違いだけれども、初春のキャラクター作りはちよつと無理があると思う。名前の飾りと花飾りを掛けているのは分かる。分かるが、それを頭に被る必要はあるだろうか、いや、ない。反語。胸にあしらうなり腕輪にするなりしろ、邪魔だろそれ、って話である。まあ、目立つと言えれば立つ。それは否定しないし、似合っていない訳でもない。というか、不思議な事にピツタリである。まさか、計算の上なのだろうか。

いや、あるいは彼女の実家が花屋か何かを営んでいて、名前の方がそれに付随する形で付けられたのかもしれない。だったら子供の頃、それで苛められたりもしたのだろうか。想像したら中々可哀想な風景である。それに、そのせいで腹黒になったとも考えられる。これからはムシリ取ったりはしないようにしようかな……。

黒子がそんな事を考えて現実逃避している間にも、場の空気はどんどん悪化している。しかも、少年がそれを全く気にせず食事をするのでから堪らない。鈍感なのか図太いのか……。まあ、どちらにしろ結果は同じなのだから、どちらでも良い事だ。

白井黒子はチラリと、敬愛するお姉様の表情を盗み見た。無表情に青筋が立っていた。矛盾するようだが、実際そうなのだから仕方ない。

彼女は思った。ああ、これもうダメですわ。ぶちギレ確定ですの……。どこかに避難しないと、黒子にまで被害が……。

そうしてそそくさと席を後にする。隣のテーブルに座っていた方々も何か感じる所があったのだろうか。なるべく音を立てないように移動してくれた。

そして、距離にして二メートルほど離れてから振り向いた、その時だった。

「……………アンギヤアババババー……！」

煌めく雷光と共に、少年の断末魔が店内に響き渡った。黒子はそ



れを見て、ただやれやれと首を降るのだった。

「はあ……。本当に、馬鹿な殿方ですの」

「そりゃあね。たしかに俺は、他の人よりは頑丈に出来てると思うよ？ それが自慢の一つだし。でもね、だからって問答無用でコンガリ遣るのはどうかと思うんだよね。だいたい俺たち初対面じゃない？ そういう苛烈なツッコミはさ、ある程度仲が良くなってからするべきモノだと思っただよ。そこんどこどう？ いやね、たしかに悪魔とか百合子ちゃんとか言ったのは俺も悪かったけどさ、でもあの電気量はあれだよ。絶対致死量だったよね。花畑見えたもん、飾利のお花が一面に散らばってたもん。悪ふざけで殺されちゃったら、もつどうしようも無いっていうかさあー。俺のアイデンティティー完全破壊って感じいー？」

少年はネチネチと愚痴を言い続けていた。かれこれ時計の長針が五分の一周を終えようとしている。なんとも度量の小さい男である。それにしても、致死量の電気うんぬん言うわりには、髪の毛がちょつと逆立つたくらいで全く持つてピンピンしている。これぞギャグ体質の真骨頂、とでも言うべき回復速度である。生身のくせに……。これはある意味で学園都市の七不思議以上に不思議な存在ではないか、とナレーターは思うが、だからと言って共感してくれる存在はいない。何故ならナレーターは孤独な存在だから！

そんなナレーターの孤独な叫びが届くはずもなく、御坂美琴はいい加減堪忍袋の尾が切れて机を叩いた。ついでにバチバチと火花のような電気が散る。

「……ああーっ！ もう！ 男がいつまでもウジウジ言ってるんじゃないわよ！ 悪かったって言ってんでしょ！ それからもう一回言っとくけど、私は百合なんかじゃないから！ どっちかと言うとその後輩の方がそっちの気が有るから！」

「ほほーう、つまり相手にそっちの気があるのを良い事に上手い具合に手籠めにしちゃったと、そういう訳か」

「んな訳あるかアー!!!」

一際強く電気が走る。すぐ目の前を走っていったそれを見て、白井黒子は非常に焦った。せつかく少しは落ち着いたのにまた電撃をぶつ放されては堪ったものではない。今度こそとばつちりを食らうかもしれないし、それに次は間違いなく店から追い出されるだろう。さつきから店員がこちらを睨んでいるのである。

「おお、お姉様落ち着いてくださいまし。永末さんも、機嫌をなおしてくださいですの」

というわけで、美琴を取りなすように黒子は声を掛けた。この時ばかりは馬鹿呼ばわりを止めて、少年にすら、もったいない敬称をつけてくれるようだった。

しかし、どこまでも空気を読まない少年。彼は鼻で笑うと、チャンチャラ可笑しいぜと言うようにふてふてしく背もたれにふんぞりかえった。

「へっ。残念ながら俺様は男女平等主義者なのでね。俺様が男だからってこの見苦しいネチネチ攻撃、もといネチネチ口撃を止める理由にはまったく成らないのさ」

「……見苦しいって事には気付いてますのね」

「ムキイーツ！ ムカツクウー！」

ふんぞりかえる少年、頂垂れるツインテール少女、苛立ちに電気をほとばしらせるビツクリ人間もとい超能力者。場は再び力オス具合を増していくようだった。

もうすでに彼らの周りに客は居らず、店員ですら直接的な関わりを持つとはしない。完全無欠な絶対空間、下手に手を加えようと一瞬にして均衡は崩れ、その余波は干渉した者を容易く滅ぼしてしまつたろう。と、ナレーターは深刻さを強調して告げる。

しかしながら、この絶対空間は、脆くもたった数秒後には崩れさる事になった。というのも、少年が立ち上がってこう言ったのだっ

た。

「ま、これぐらいにしとくわ。何か疲れたし、お互いそろそろ帰らねえといけないしな。たしか黒子、門限があるんだろ？」

拍子抜けしたような表情をする白井黒子と御坂美琴。時計を見ると、成る程、いつのまにやらそんな時間になっていた。

「つつわけで、じゃあな黒子」

「え、あ。はい。さよならですの、永末さん」

満足そうな顔をした少年はジャアニーと言葉を捨て置き、去っていった。

しばらくして、残された美琴はポツリと呟いた。

「な、何なのアイツ……」

黒子が苦笑いしながら言う。

「ええと、悪い人ではないんですよ？ ただちよつと、表現が独創的と言いますか、価値観が他人と違うと言いますか……」

「……それもうただの変人じゃない。ていうか黒子、あんたあんなのと何処で知り合ったわけ？」

「それがその」黒子は急に歯切れが悪くなって、視線を泳がした。ただ、答えないという選択肢はなかったのか、顔を赤くしながら、言った。「恥ずかしながら、少しまえスキルアウトを取り締まった時に、その、不意を打たれてしまいました、怪我をしそうになったんですの。その時に偶然助けて頂いて、本当は一般の方がこういう事に首を突っ込まれたりするのは好ましくありませんけれど、私の代わりに怪我までさせてしまいましたし、お詫びに食事に誘ったりしてたら、いつの間にか仲良くというかズルズルというか、まあ、そんな感じでこうなってしまったんですの」

「アイツが人助けえ？ うわあ、似合わない過ぎでしょ」

「で、でも、その時は格好良かったんですよ？ いつもはあんなで全く駄目な奴ですけど、時どき子供の面倒を見たりだとか、結構良いところもあったりして……」

「ああん？ 黒子ったら、やけにアイツの肩を持つのね。まさかと

は思うけど、惚れちゃったりとか？」 美琴がニヤリとして言った、正にその瞬間だった。黒子から表情が消えた。それはもう、本当に一瞬の出来事で、刹那を飛び越えた静寂の域であった。

「あ、それはないですよ。むしろこの世から消してやりたいくらいですわ」

黒子は無表情にそう言うと、クスリと笑った。何だか無性に怖い。目が笑っていないとかいう以前に、無表情の笑みとか、なにそれ怖い。黒子の突然の変化に美琴は表情が凍るのを感じ、ニヤリと上げた口角を強張らせて、ひきつった笑みを浮かべるしかなかった。

「そ、そう……」

そこへ、計ったようなタイミングで携帯電話が鳴った。救われたと思う美琴は心の中で密かに息を吐き出した。

と、黒子のごそごとと携帯電話を取り出す。どうやらメールらしい。受信画面に切り替わると、永末孝弘ながすえたかひろという文字が浮かんだ。

へえ、下の名前、孝弘って言うんだ。などと、キャラが異様に濃かった少年のフルネームを知った事に美琴が僅かな感慨を覚えていると、メールの本文に目を通した黒子の身体がピキリと固まった。

それに疑問を覚えるか否かの微妙な時間を経て、彼女の身体がわなわなと震えだす。ついで、不気味な笑い声が彼女から響いた。

「ふふ、ウフフ」

「え？ あれ、黒子？ 黒子さーん？」

「あああの男、次会ったら体内に異物ぶちこんで差し上げますわ。ウフフ、ウフフフフ」

『よう黒子。俺様今月ピンチだから代わりに会計よろしくな。さすがジャッジメント、頼りになるぜ。アツハツハツハ！』

メールにはそんな事が長々と書かれていたらしい。永末孝弘、中々の男だと、御坂美琴はちよっぴり感心した……りはしなかった。というか、するわけがない。

「あああ、あのヤロー！ つぎ会ったら気絶どころか廃人寸前まで電氣流してやるう！ 黒子ストップ！ そんなに頭ぶつけたら血が

出ちゃうって、アー、言わんこつちやない。ちよっ、黒子止めなさ  
い、止めなさいってば、ちよ、やめ、ちよっ、や、……やめろっつ  
ってんだろーがあぁあー!!」

？ 時系列？ 何それ美味しいの？

ファミレスから退場し、黒子にメールを送った永末孝弘は、携帯を閉じてため息を吐いた。その顔には、先ほどまでのお茶らけた雰囲気は微塵も残っていない。

「ったく。手のかかる奴らだ」

彼は小さくつぶやいて視線を上げた。視界を埋め尽くすように立ちふさがる人の波。その中心、彼等の足元に、身体を小さくして震える年端もいかなない子どもの姿があつた。孝弘は誰にもばれないように小さく舌打ちをした。

と、その中から、比較的大きながたいをしている男がうすら寒い笑みを浮かべながら現れた。肩に金属バットを担いだりと、一世代前の不良スタイルを如実に体現している。男は笑みをそのままに、口を開こうとして。

「俺らに何か用かよ、兄ちゃぶっ!？」

頭から壁に叩きつけられた。見ると、その頭は、孝弘の手にがっしりと鷲掴みにされていた。

男が腕力で持つてその巨体をぶつけられたのはどうみても明らかで、また、そのだらんと垂れた両手から威力が容易に殺人を犯せるような領域にまでいたっている事も推察できた。ただ、それをした人物は見るからに線の細い、どちらかという痩せ形に分類される人間で……。ゆえに、男の仲間であつた不良たちは一瞬状況を理解できなかつた。

呆けたような表情をして立ちすくんでいる彼らを見て、孝弘はまた、舌打ちをした。

「ちっ。このクソツたれな能無しどもが。力で誰かを蹴るってことはな、力で誰かに蹴られても文句は言えねえってことなんだよ。分かつたら、さっさと俺様に蹴られるやクズどもが」

孝弘がぱつと手を離すと、男の巨体が膝から崩れ落ちるようにし

て地面に倒れた。そして、やっと状況を理解した不良たちに動揺が走った。

孝弘が倒した男は彼等の中で一番強い人間だった。見た目通りの圧倒的なパワーに加え、巨体に似合わぬスピードと判断力。男は、肉弾戦においては彼等の内の誰よりも強かった。強い、はずだった。孝弘は男達が動揺にざわめく中、うずくまる子供の方へ、足を踏み出した。口ではああ言ったが、最優先事項は人質の確保である。ただそれを感じかせないように、孝弘は一気に加速して、呆然と立っていた不良の内の一人、その正面に立った。

「まず、てめえから逝つとけ」

そして、腹部に抜き手を入れる。内臓を直接攻撃されるような嫌悪すべき感覚に、不良は一瞬にして意識を失い、崩れ落ちた。

「ヒ、ヒイツ」

傍らの男が情けない悲鳴を上げて後退る。孝弘はそれを一瞥すると、邪悪な笑みを浮かべて近づき、鼻先がくつつくほどに顔を寄せ、言った。

「ナアニ逃げようとしてんだ？ 言っただろうが、黙って俺に……」  
男の頭を鷲掴みにし、壁にガリリと押し当てる。「殺されるってよ  
お」

それは正気の人間の表情ではなかった。血走った目で睨み付け、唾液が溢れた口でニタリと笑う。そして、彼は言った。

「そおら、死にな」

「なんて出来たら良いんだけどね……」

「ああ！？ なにゴチャゴチャ抜かしてやがる！ ぶつ殺すぞ！」

「うっ。睡が……、ちよつとお前、汚いだろっ。人のこと考えて行動しろよ。だから不良になつたりするんだよ、この馬鹿」

さて、永末孝弘の脳内妄想は一端ここで打ち切りである。残念な

がら、孝弘は肉体的には普通よりちょっと頑丈なだけの高校生なので、大の男を片手で壁に叩きつけたりは出来ない。

どこから妄想に入ったかというところ、もちろん壁に叩きつけた所からである。しかし、金属バットを持った男がノシノシとやってきたのは逃避できない現実なので、孝弘は仕方なく、その男と話していた。

にしても、なかなか肝っ玉の太い男である。十数人の不良に囲まれて、どうしてこんな口が聞けるのだろうか。まあ、どうやら全員が何かの能力者だとかいう訳ではないようだが、それにしたって発火能力者や発電系能力者の一人や二人、いるかもしれないではないか。もしかして自殺志願者なのかこいつ、とナレーターは推察するが……。いや待てよ、仮にもコイツは主人公である。隠された能力か何かがここで明かされたりするのかもしれない！ そうと決まればナレーターのヤル気も充電マックスである。さあ来い、どんと来い！

ナレーターが期待の目で見つめるなか、金属バットの男は孝弘をギロリと睨みつけた。

「あんだとお！？ 死にてえらしいなあ！」

「だから唾を飛ばすなって言ってるんだろ。だいたいよお、死ぬだとか殺すだとかボキャブラリーが貧困過ぎるぞ、お前。知ってるか？

高位の能力者は全員頭が良いんだぜ。その分だとお前、無能力（レベル0）だろ」

「こ、殺す！ 殺してやる！」

孝弘は遊ぶように挑発を繰り返しつつつけた。予定調和のように金属バットの男は憤慨していき、もはや正常な思考は出来なくなっているようだ。孝弘の言葉を否定する事もせず、男は金属バットを天高く振り上げた。

その動作を見た孝弘が、ニヤリ、と笑みを作った。計算通り、というようなその笑いは、冷静さを欠いている男以外には酷く不気味に映った。この余裕は一体どこから来るのか、その疑問に答えるよ



うに孝弘は男を見ながら口を開く。

「へえ。で、それを降り下ろした瞬間、お前は現行犯で捕まるわけだが、良いのか？」

「ああ！？ 何言つてやがる！ ぶっ殺すぞ！」

「おお怖い怖い。でもよお、これ見てもおんなじ言葉が言えるかなあ？」

相変わらず貧困な語彙力で脅迫するゴリラ、もとい北京原人、じやなかった、金属バットを掲げる男。しかしながら、孝弘はやはり面白そうに笑うだけである。そして、懐からある物を取りだし、男の眼前に突きだした。

「けい……たい？」

「おお、正解だ。良く解つたな、誉めてやる」

あくまでも見下すように孝弘は告げる。男はいぶかしげな表情をして、バットを掲げたまま、口を開いた。どうやら幾分か冷静さを取り戻したらしい。少なくとも、会話ができる位には。

「それが何だつてんだ。言っとくが、助けを呼ぼうとしても無駄だぜ。その前にこれでお前の脳天かちわつて……」

「チツチツチツ。だあからお前はレベル0だつてんだよ、能無しがこの俺様が何の対策もせずこんな路地裏に足を踏み入れるわけないだろうが、馬鹿」

とことんけなす孝弘。いったん収まった怒りのボルテージが再び上がってきたのか、男の額に血管が青く十字を描いた。孝弘はそれが心底面白いと言うように、笑みを深くする。

「俺様がここに来た瞬間、何してたか教えてやるよ。メールだよ、メール。ジャツジメントにな。つまりだ、お前が俺を殴ってから数分、たった数分時間を稼ぐだけで、お前らはお縄につくって寸法だ」「て、テメエよくも……！」

「おおっと、良いのかなこんな無駄なお喋りに時間を使って。さつさと逃げた方が堅実なんじゃないか？ あ、堅実なんて難しい言葉は分からないか。要するに、捕まる危険性が少なくなるよってこ

とだ」

孝弘はそう言い切ると、携帯をプラプラ左右に揺らした。男は金属バットを掲げたまま、ウググと息を詰まらせる。と、そんな二人のやり取りの様子を見ていた不良達が、口々に言いはじめた。

「お、おい。やめとこうぜ。そいつの話が本当だったら、さっさと逃げた方が良いつて」

「そうだぜ。こんなんで捕まったら洒落になんねえよ」

早く逃げよう、捕まるぞ、今ならまだ間に合う、やめろったらブタゴリラ、ブタかゴリラかハッキリしろよ、などなど。……まあ、最後の二つらへんは悪口かもしれないが、全員が男をなだめたのだった。

「く、クソッ」

そして、結局彼らは逃げていった。孝弘は携帯をポケットにしまくと、気障ったらしく髪の毛をかき揚げた。亜麻色の髪が光を反射して、美しく煌め……かない。路地裏は暗いのである。

「ふっ。他愛もない奴らめ」

それから、汚れてもいないのに服を叩いていたその時だった。不意に声が掛かった。

「あ、あの。有り難う、キミ」

「あ？ 何が？」

見ると、フレームの曲がった眼鏡を掛けた気弱そうな少年が感動のような感情を満面に浮かべながら、孝弘に向かって立っていた。こちらは孝弘と違い、服が砂や埃で汚れている。少年は孝弘に頭を下げて、もう一度言った。

「本当に有り難う、助けてくれて」

孝弘はちよつと考え込んでから、そういえば何か倒れてたヤツが居たなあと、なんともこの少年には言えない事を思った。しかし良く考えると、考えなくても、シャッジメント、実際孝弘は何もしていない。こ  
うなってしまったのはただの成り行きでしかなかった。

風紀委員にメールをしたというのは、まあ、黒子にからかいのメ

ールを送ったから嘘ではないが、数分で来るなんてのはそれこそ真っ赤な嘘である。いや、もしかしたら怒り狂った二尾の化け物が探しに来るかも知れないが、そうなった時に死を見るのは他でもない孝弘だろう。ちなみに、二尾とは文字通りツインなテールの事である。

「ええと、ああ。いや、そんな大した事じゃない。だから、そんなに頭を下げてないで顔上げる」

どうやら、孝弘もその点を考えて何となく感謝を受けるのに気が引けたらしい。やはり彼も日本人だったようだ。対して少年は、赤の他人である自分を助けてくれた上に、感謝まで辞退しようとする見知らぬ少年に大変感動していたが、孝弘はそんな事を知らない。

「じゃ、じゃあ、俺あっちだから。次からは絡まれないようにな」  
そして、彼はそそくさとその場を立ち去った。

「あ、ちよつと、待ってください。何かお礼でもっ」

後ろからそんな声が聞こえてきたが、孝弘はちよつとした罪悪感から、やはり逃げるようにその場を走り去ったのだった。

……ちよつと待て。ただ他人を馬鹿にして騙し抜いただけじゃないか！ 特殊能力は？ ハイパーパワーはっ！？ ナレーターは期待外れ感にそんな事を叫んでいたが、やはり、聞いてくれる人はいないのだった。

「……すごい、人だったな。能力も何も使わずに、不良を追い払っちゃった」

路地裏に残された少年は、孝弘が去った方向を見ながらポツリと呟いた。ちなみに、さっきのアイツみたいのを口八丁と言うのである。

「僕も、あんな風に……」

成らんでよろしい。ていうか成るな、成らないで！ ナレーターの叫びはやはり届く事なく、少年の呟きだけが路地裏に木魂していた。

流麗な投球フォーム。足を高く上げ、ウィンドアップからツーステップで腕を振り抜く。

「ふんぬらばっ！」

ガキンという音がして、孝弘が投げた空き缶はお掃除ロボットの頭にぶち当たった。

「っしやきたストライークッ！」

大きくガツポーズを取る永末孝弘。ついで、腰に手をあてて笑いはじめた。一つ注意事項、ヨイコの皆は、絶対に真似しちゃダメだぞ？ それにしても、なんてはた迷惑なヤツだ。

「いやはっはっはっ。この調子だとプロ野球も夢じゃねえな」

孝弘は笑いながら満足げに頷く。

たしかに夢じゃない。夢どころか、幻想の彼方である。しかしながら、それを言ってくれる第三者はこの場にはおらず、孝弘は意気揚々と新しい空き缶に手を伸ばすのだった。

再び足を高くあげ、ウィンドアップからのツーステップで腕を振り抜く。風を切って飛んでいった空き缶はしかし、今度はお掃除ロボットには当たらずに歩道の方へと転がっていつてしまった。

「あっ、やべ」

時刻は午後十時をとくに回り、辺りには街灯がポツポツと灯っているだけで、他に灯りという灯りはない。そんな中を出歩いている人間は少ないと思うが、誰もいない公園でロボット相手に空き缶を投げて喜ぶ変態がいるのだから、居ないとは言いきれなかった。孝弘は誰かに当たったんじゃないかと、ビクビクしながら歩道に出てみた。と、その時、闇夜をつんざく叫び声が聞こえた。

「ふ、不幸だぁー！」

ビクウツと体が震える。何を隠そう、不良に絡まれても全く物怖じしない肝っ玉の太い永末孝弘は、なんとお化けが苦手だったのだ、とかいう設定はない。良くも悪くも凶太い孝弘である。お化け屋敷

なんぞ鼻くそをほじりながらも一周できる。しかし、彼はまた、良くも悪くも日本人なのであった。他人に迷惑を掛けることを極端に嫌う日本人の血は、彼にも脈々と受け継がれている。で、あるがゆえに、どう考えても自分が何らかの原因を作ったに違いないこの悲鳴を聞いて、彼は身体を震わせたのだ。

とりあえず、何があつたのか見てみよう。あんな近所迷惑で訴えられても仕方ないような大声で叫ぶくらいだから、きっと大変な事に違いない。もしかしたら、今度は俺がお縄につく事になるかも……。

そろそろと叫び声が聞こえた方に近づいていく。ある程度して、うずくまる人影が見えるくらいになると、その人の声が耳に入ってきた。

「うう。不幸だ。不幸過ぎる。自販機は金を飲み込むし、自動車には轆かれかけるし、犬のウンコ踏むし、バーゲンには遅れるし、財布落とすし、妙に切れた不良に因縁つけられるし、逃げ切ったと思つてなけなしの金で買った晩飯はこの有り様だし……。ちくせう！ 上条さんが何したつてんですか！ なんで空き缶なんか転がつてんですか！ 掃除ロボットサボリやがったな！」

……間違いない。大変な事が起きている。そして、まさに不幸のオンパレード。独り言でこぼしただけでこんなに悲壮感が溢れているのだから、実際に見ていたらもう、居たたまれなくて目を背けていたかもしれない。

しかも、やつと一息吐けると思つた時に追い討ちでこれである。辛い、辛すぎる。孝弘は決めた。彼の心の傷が癒えるかどうかは分からない、分からないが、罪滅ぼしはしよう、と。

「あの、すみません。大丈夫ですか？」

できるだけ柔らかく聞こえるように、と意識して話しかける。こういう心がささくれだった時に話しかけるのは、なかなか難しいものがある。ただの思いやりですら煩わしく感じられるモノだ。昔、自分も心配してくれた人に酷い言葉をかけてしまった事があるから、

その気持ちは良くわかった。どんな反応が飛び出すか、孝弘は唾をこぐりと飲み干して待った。

しかし、返ってきたのは、予想外の答えだった。

「え？ あ、はい。え？ ……あ、大丈夫です。こんなのいつもの事っすから」

逆に孝弘の方が衝撃を受けていた。擬音で表すなら、『ピカアアッ！』が正しく当てはまるような衝撃だった。

……い、いつもの、事？ こここ、こんな不幸が、いつもの事だつてえー！？

衝撃に固まっていると、うずくまっていた彼が立ち上がって孝弘に笑いかけた。綺麗な笑みだった。若干、いや、かなり幸薄そうな感じだったけれども。それはとても綺麗な笑みだった。それがまた、孝弘の心に突き刺さる。

気が付けば孝弘は涙を流しながら彼の手を握りしめていた。困惑する少年の手は少し節くれだっていた。

「頑張ってくれ！」

「え？ 何が？」

「負けるなよ！ 人生きつと良い事がある。そのうち必ず良い事があるから！ ……あ、ティッシュ持ってない？」

「は、はあ……」

孝弘は少年からティッシュを受けとると、勢いよく鼻をかんだ。

「ズズッ。ありがとう、返す」

「え、いや、あの、要らないんだけど……。鼻水でベタベタなんだけど」

「遠慮するな。あと、これ……、少ないけど、良かったら貰ってくれ」

孝弘は財布を取り出すと、それをそのまま少年の手に手渡した。ちなみに、孝弘はカードはカード入れに分けるタイプであるため、財布には現金しか入っていない。ついでに言うと、中には降ろしたばかりの五万円という中々の大金が入っていたのだが、孝弘はあま

りの衝撃にそんな事はすっかり忘れていた。

また、使用済みティッシュと財布を受け取った少年も、困惑を隠しきれなかった。

「は、はい。え？ なにこの状況」

「ぼやく少年。その手を再び取って、孝弘は言った。

「負けんなよ！ 負けんな！」

「……はあ」

生返事を返す少年の肩をバシバシと叩き、孝弘は背を向けて走った。なんかそんな気分だった。姿がなんとか見えるところまで行って、街灯の下で立ち止まる。そして振り返り、孝弘は叫んだ。

「負けんなよー！！」

「煩い！ 近所迷惑だバカ！」

「すんませーん！」

そして、道路脇の窓から身を乗り出した男の人に怒鳴られてから、孝弘は消えていった。あとには、ベシヨベシヨのティッシュと渡された財布を持った少年が立っているだけだった。

「な、何だったんだ。あの人」

彼は両手に残された二つの痕跡を見て呟いた。

ちなみに、後で彼は財布の中身を見て驚愕することになる。同じころに孝弘が五万円が入っていた事を思い出していたうちまわっている訳であるが、それは彼のあずかり知らぬところだ。ゆえに、財布を落として今月どうしようと考えていた彼はこう思った。あの子はきっと天の使いだったんだ、と。

付け加えておくと、この時はまだ梅雨前だったりする。要するに、五月の初旬である。原作までは、まだ遠い……。

？ 言つとくけどこの小説、まだ五月だかんね！

翌日、孝弘は男子寮の自室で目を覚ました。時刻は午前六時十七分。六時十五分を起床時刻に設定している孝弘にとっては、いつも通りの時間である。

ちなみに、孝弘の寮は俗に言うマンションのような体系ではなく、一度屋内に入ってから、小分けされた部屋に入ると言った、ホテルや旅館に似たタイプのモノだ。だから、トイレとシャワーは自室にあるものの、風呂などは共用で個人用の物は無かつたりする。まあ、別段、エリート高校に通っているわけではないので、そこまで高い要求はしない。一人部屋を貰えているだけ、マシだと思う。

備え付けのベッドからシーツを引き剥がし、孝弘はそれを長方形に折り畳んだ。ここの寮官は門限以外には何かと厳しいので、こうしないと罰があつたりするのだ。最初のころは怠けて死にかけた事もあつたが、この寮に来て一月近く経つた今ではこれをしないと朝という気すらしなくなっていた。まあ、リュケイオン創設者で言う所の習性的徳というやつである。あるいは、洗脳。

ベッドの右上にシーツや枕を重ねて置くと、次に孝弘はカーテンを開けた。朝日が真っ直ぐ入って来るような間取りではないため劇的な変化はないが、それでも部屋は幾分か明るくなった。

孝弘は微笑んで頷き、そしていつもの台詞を口にした。

「ああ。今日は良い日だ。死ぬにはうつつつけの、実に良い日だ」  
沈黙……。何がしたいのか全く分からない。ここに彼の友人が一人でも居たらこう言っただろう。何言つてんのお前。

だがしかし、孝弘はずっと昔から毎朝これを欠かさずやり続けている。何らかの意図があるのか、はたまた何も考えていないただのバカなのか。それはまだ、分からない。



学園都市、それは、首都圏において東京都の約三分の一の面積を占領する意味ワカメな都市の通称である。この中にはありとあらゆる教育機関が詰め込まれており、東京都23区のパクリなのか何なのか、広いようで狭い敷地を23の学区に分けている。

人口は約230万人。この八割は学生で、小学生に入る前の小さな子供から大学院に通うような大人までがこれに数えられている。すると、残りの二割が仕事をする大人となる訳だが、永末孝弘はこの事に若干の違和感を覚えていた。

「たしか学園都市の人口は230万人だったな。その二割が大人って事は、46万人か。つまり、学生は184万人で……。まあ都市外からも生徒を入れたりするから、小中高生はだいたい同じくらいの人数なんだろう。保育園やらも同じだとすると、二、三歳から十八歳くらいまでの人口分布はだいたい等しいと考えられるわけだ。大学生は全員が進学してる訳じゃないだろうから少ないとして、それでまあ全部併せれば10万は軽く超すだろう。残りが170万と考えると、小中高生で120万人くらいかな？」

ぶつぶつと呟きながら、孝弘はノートにペンを走らせる。

「小学生は一人の教師が殆どの教科を教えるから、だいたい一人につき30人教えるとして、教師2万人。中学校からは一つの教科に何人も教師がいて、ついでに養護教諭やら入れたりすると、まあ軽く8万はいくわな。小中高で10万。保育園とかはガキの面倒見なといけないから必然大人も多いだろうし、給食係とか守衛とかも必要だから、それ入れたら教育関係だけで20万人くらい。とすると、残りの大人は24万人か、それ以下だな。うーん、能力開発の研究者が何万といるし、病院なんかも結構あるからなあ。普通の仕事してる人って、20万人もいないんだよなあ。多く見積もったとしても、23学区の1学区に1万人以下……」

孝弘はそこまですをバラバラとノートに書き留め、1万人という数字を丸で囲むと、唸りながらその数字をシャーペンの先でトントン

と叩いた。

「うーむ。やっぱ、大人が少ないんだよなあ。商業とか工業とかも外とは提携してないみたいだし、それに人員割いたら、サラリーマンとかほぼ0じゃね？ そのくせコンビニやらデパートやらには平日の昼間でもちゃんと店員が居るし……。いったいどうやって回ってんだ、この町。……。あーっ、まったく分からん！」

シャーペンの先から飛び出ている芯を収め、孝弘がワシワシと頭を搔いた、その時だった。前方から何か白く細長い物が飛来し、孝弘の筆箱を吹き飛ばした。

「ほおう永末。私の説明のどこが分からないって？ 言ってみる」  
見ると、孝弘の数学の教科担、千葉陽子が素晴らしい笑顔をして立っていた。そうである。何を隠そう現在は数学の授業真っ只中であつた。

孝弘は荒ぶる千葉陽子の背後に鬼を幻視しながら、ひきつった笑みを浮かべて吹き飛ばされた筆箱に目をやった。そのかたわらには新品のチョークが転がっている。孝弘は瞬時に理解した。この女は人間じゃねえ、もっと別の、恐ろしい何かだ！

まあ、高校に入つてすでに一月以上経っている。それくらい既知の事実であるが、久しぶりに人間離れたパウワアを見せつけられて孝弘はそれを再認識していた。

しかしながら、授業中に別の事を考えていましたとは言えない。そんな事したら殺されかねない。孝弘は唾をぐくりと飲み込んで弁明した。

「いえ、すいません。ね、寝惚けてました」

「ほほう。私の授業で居眠りをするとは、貴様なかなか挑戦的だな。言ってみろ、どうされたい？ ん？」

すると、千葉陽子の笑みがさらに深くなった。

墓穴ほつたー！！ もーダメだあー！ 父さん母さん、親孝行できなくて御免よーっ、先立つ息子を許してクダシャアイ！

「とりあえず、永末孝弘、放課後私のところに来い。良いな」

しばらくして、ガタガタと震えながら立つ孝弘に、千葉陽子はそう言って授業を再開したのだった。

一日の授業が終わって、やっと放課後になった。孝弘は机に頬を押し付けて魂を吐き出していた。あの数学からこつち、何故か事ある毎に指名されてしまったのだ。これから一週間かけて使うはずだった精神的エネルギーが一気に枯渇した気分であった。しかもこの後、鬼教師のもとに呼ばれている。

行きたくねー、行きたくねえよおー。ていうか何であの人教師なんかやってんの？ もういつそのこと性転換手術受けてボクシングの世界タイトルでも目指してくれよっ！ 頼むから！

孝弘は魂を吐き出しながら、そんな事を考える。

しかし、世の中そう上手くはいかない物である。どころか、今日の場合は最悪だったようだ。机に突っ伏していた孝弘に、今一番聞きたくない人の声が聞こえた。

「ここにいたか永末。おい、寝てないで起きろ。さっさとイクゾ」

イク？ 逝くだって！？ あの世にかっ！ 孝弘は魂を収納すると、ガバリと起き上がって窓へと走り寄った。しかし、棹に足を掛けたところで肩を捕まれる。

「おい。どこに行く気だ。お前は私と来るんだよ」

「イイ、イヤジャァー！ ワイはまだ死にたくない、死にたくないんじゃー！」

孝弘は窓の縁を掴んだり体を跳ねさせたりして抵抗した。しかし、必死の抵抗は一発のパンチであっさり陥落する。グフツ、とどこかの量産型の名前を吐き出して孝弘は連れていかれたのだった。

人生とは往々にして上手くいかない物である。あらゆる条件が重なりあう事で生じ、時には個人の衝動的な感情にも左右される。そ

れを全て掌握し思い通りに操ることは、神成らざる人の身では不可能であり、いくら科学が発達しようとその真理が変化する事はない。例えば、そこに転がっている石ころが一つ、たった一つでも無かったとしたら。それだけで人生は変化しかねない。機嫌が悪い時にそれに躓き更に悪い気分になる可能性があれば、巡り巡って何らかの幸運に遭遇する可能性だってある。それはごくごく微小で、ほとんど『有り得ない』事かも知れない。しかし、0でない限り、無視する事は出来ないのである。

もしかしたら、ありとあらゆる事象を事細かに分析すれば未来を予測する事はできると、そう言う人間も居るかも知れない。しかしながら、予測した時点で元となるデータ自体が変化する事を忘れてはいけない。予測された未来、それを知っている存在が生まれたという時点で、未来は変化するのだ。さながら輪を描いたドミノのように、たった一ヶ所が倒れるだけで全てのモノが巻き込まれていくのである。

まあ、何が言いたいかと言うとだ、孝弘がこのような状況に陥っているのにもそれはそれは深い理由と莫大な数の条件、その他諸々が関係しているのである、と……。

「永末さん？ 何逃げてらっしゃるんですの？」

「アハハハ、黒子くん可笑しな事言うね。これ逃げなかったら死んじゃ……ワヒッ！ アブネエツ、今本気で狙ったろ！」

「ウフ、ウフフ。また、また避けやがりましたわね。さつさと……、さつさと殺されるデスノオー……！」

孝弘は走っていた。時折ジャンプしたり仰け反ったり急停止したりと様々な動作が織り込まれてはいたが、孝弘はとりあえず走っていた。

理由は簡単である。死にたくないから。まあ、それだけで空間移動して突然出現する物質を避け続けることが出来るのかと問われたら何とも言えないが、実際出来ているから、出来るのだらう。きっと。

何度も何度も翔ばされてくる大小様々な物を避け続けて、どれくらい経っただろうか。やっと終わったと思う頃には、黒子の目の前に立って、息を切らす彼女を見ている自分がいた。

「……はあはあ、それで、なんで、永末さんが、ここに居るんですの」

「いや、俺が聞きたいくらいだから。そういう黒子は？」「……ちっ」

「え？ いま舌打ちした？ 舌打ちしたよね」

「うるさいですわ。だいたい、永末さんが悪いんですのよ。昨日、あまりの殺意、じゃなかった、怒りに我を失って、気付いたら門限を過ぎていたんですの。お姉様は黒子を置いて先に帰ってしまったわましたし、本当、貴方なんか死ねばいいんですわ」

「……へ、へえ」

孝弘は苦笑いして、怨嗟を吐き続ける黒子を見た。ちなみに、御坂美琴はぎりぎりまで黒子を宥めようとしていたから文句を言われる筋合いは無いのだが、正気を失っていた彼女はそんな事覚えていない。

「そ、それはそうとさ、俺達ここでなにすんの？」

孝弘は気を取り直して言うと、周りを見渡した。プールである。

学生が泳ぎ回り、おばちゃん集団が水中歩行に勤しむ、何の変哲もない競泳用のプールである。縦50m、横25m。まだ五月という事もあり、水も張られていないプールは、余計に広く感じられる。

まさか、いくらあの鬼教師でも、ここに飛びこんで死ねとかは言わないよな……、と孝弘が不吉な事を考えていると、黒子が思いつきりため息を吐いた。

「はあ、これだから素人は……」

一体何の素人だ。そして、お前はなんの玄人なんだ。孝弘はそう思ったが、口には出さない。

良いですか、と前置きをして、黒子は言った。

「このプールを、今日中に掃除するんですの」

「……ふうん」

孝弘は呟いて、プールをもう一度見渡した。縦50m、横25m。水深は目測145〜150cm。総面積約1475?。現在時刻、午後4時を回ったところ。

「……。無理じゃね?」

孝弘の呟きに、黒子は何も答えなかった。

結果として、プールはなんとか及第点を貰えるくらいには綺麗になった。それもこれも、黒子のおかげである。彼女が何をしたのか、掃除の1コマを取り上げて見てみよう。

「ホラホラ、立ち止まったら突き刺さりますわよっ」

「ウギヤアアアー! ヤメテくれえー!」

……以上である。

掃除が一段落して、孝弘はフラフラと備え付けのベンチに倒れ込んだ。腰に特大サイズのデッキブラシをくくりつけ、全身をピクピクと震わせる姿は何とも哀愁を感じさせた。

「無理、もう無理。マジ無理」

「永末さん、わたくし喉が渴きましたの。ジュースを買って来て頂けます?」

「君は鬼ですかっ、ウ!?!」

ガバリと起き上がって言ったその時だった。孝弘は、額に妙にヒンヤリとした感触を感じて小さくうめいた。

視線を動かすと、どうやら黒子が目の前に立っていて、何か冷たいモノを額に当てているようであった。黒子はクスリと笑うと、額に当てていた何かを孝弘の目に見える所まで下ろす。缶ジュースだ

った。

「ふふ、冗談ですわ。とりあえず、これはわたくしの奢りですの。今日はありがとうございました。おかげで早く終えられましたの」

「く、黒子……」

孝弘は初めてこの後輩の顔をまじまじと見つめた。もう少し場が整っていたら、もしかしたらロマンチックな雰囲気になっていたかもしれない。しかしながら、孝弘の腰にはいまだ特大のデッキブラシがくっ付いており、手足は小鹿のようにプルプルと震えている。ハッキリ言って、そんな空気ではない。まあ、第三者視点では……。

ただ、孝弘はあまりの出来事に感動していて、そんな事はどうでも良かった。立ち上がって缶ジューズを黒子の手ごと握りしめると、彼は涙目になりながら叫んだ。

「黒子！」

「は、はい？」

「黒子、黒子っ！」

「な、何ですか？」

「黒子オー、お前ってヤツはあ！」

「だから、なんです……ワハイッ!?」

気が付くと、何故か黒子の小さな身体は孝弘の腕のなかにすっぴりと収まっていた。困惑する黒子。心なしか、顔も僅かに赤い……ように見える。

「なななな、なにをしてらっしやるんですの！ 離してください……いひうっ？」

抵抗しようと手を間に入れるが、今度はそれごと頭を抱きしめられた。華奢そうに見えて、なかなかにしつかりと鍛えられた胸板を感じて、黒子は顔が熱くなるのを感じた。

「今までただの生意気なクソガキだと思ってたけど、実際そうだけど！ お前良いヤツだったんだなあ！ なんか良い匂いもするしっ！」

「い、良い匂っ……あうあうあう……」

興奮状態の孝弘は何も考えずに思った事を口にする。いつもなら最初の行<sup>くだり</sup>だけで殺られかねないのだが、黒子も突然のハプニングに対応できていないようであった。ここだけの話、瞬間移動能力者<sup>テレポーター</sup>とは非常に繊細な存在なのである。

「ウオオオ！ 黒子ー！」

孝弘が一際大きく叫んだその時だった。ガシャアン、という何か壊れるような音が辺りに響いた。はっと我に帰る黒子。いまだ慟哭に似た叫びを上げる孝弘の腕の中で身をよじり、音のした方向を見ると

「げっ、まずった……」

バケツをひっくり返して苦い顔をしている少女、もとい、麗しのお姉様、御坂美琴がいた。黒子はサーッと血の気が引くのを感じた。

「おおお、お姉様？ なななぜコチラに？」

「え？ いや、何でもないので。ただ掃除大変だろうと思って差し入れを持ってきたんだけど……、なんか、邪魔みただから帰るね」  
顔に喜色の笑みを張り付けたまま、美琴は、ごゆっくり、と言つて後退りしていく。

「ち、違いますのお姉様！ これには理由<sup>わけ</sup>が！ ちよっ、永末さんも正気に戻ってください……」

「黒子ー！」

「ええい、このバカッ！ ああお姉様、待つてくださいまし！ わたくしはお姉様一筋でっ」

結局この無駄なやり取りは黒子が孝弘を空間移動<sup>テレポート</sup>するまで続いた。ちなみに、空中に移動させられた孝弘は頭から落ちた上に、ようやく腰から外れたデッキブラシの追撃を後頭部にくらい気絶するわけであるが、まあそれはどうでも良いことである。

ところで、どのように掃除をしたかであるが、それは読者諸君の想像にお任せしようと思う。時刻は午後6時半。とりあえず、たった二時間弱で馬鹿みたいに広い面積の掃除を終えた孝弘を、ナレー



ターだけは素直に褒めておく事にする。

？ ちよつとした昔話から。

永末家は裕福な家庭ではなかった。どちらかと言えばむしろ、貧しくさえあった。両親は共働きで子供にかまう時間をそれほど作れてはいなかったし、仕事の関係上、引越しの数も少なく無かった。ただ、それでも彼らには笑顔が溢れていて、二人いる兄妹も、時折する喧嘩も含め、仲は良好だと言えた。

彼らはとても幸せだった。欲を言えば、あともう少し、暮らしに余裕を持てる程度のお金があれば良かったが、それでさえ、出来ることならという、控えめな希望でしかなかった。

「兄ちゃん、明日、誕生日だよね？」

四月のある日の事だった。桜が散り、どことなく虚しくなる寂しさを感じさせる麗らかな日に、少女が言った。二房の髪がフワリと風になびいて舞った。

「ん？ …… あー、うん。そういえばそんな日だったか」

「あれ、まさか忘れてたの？ 自分が生まれた日なのに」

「うーん。まあ、そんなに重要って訳でもないし、良いだろ。別に」  
「あーあー、またそんな事言っちゃって」少女は呆れたように言う  
と、朗らかに笑った。「でも、今年は期待してて良いよ。何てったって、この私が誕生日プレゼントを買ってあげるんだからね」

それから、小さな身体を目一杯使い、胸を張った。少女は兄のためにと、ここ三年ほど、ずっと御年玉を貯めていたのだ。まだ幼い彼女に出来るのは、それ位しかなかったから。

「うん。ありがとう。楽しみにしてるよ」

「…………… エヘヘッ」

少女はまた嬉しそうに笑い、口から血へドを吐き出した。

「 えさん、な……末さ……」

孝弘は、遠くから聞こえてくるような頼りない声に意識を覚醒させようとしていた。酷く気分が悪い。出来ればもう少しだけ眠っていたかった。

だから、孝弘は聞こえてくる小さな声を無視した。近かった気配が遠退いていくような気がして、孝弘は無性に、胸が焦がれた。大切な何かだったような、そんな感じを覚えたのに……。

「ダメ……わ。ぜん……、起き……んの」

「うーん。じゃ……シヨック療……つてみ……か」

「お、お姉……？ そんな……強い……はさすがにダ……と」

「死には……いでしょ。良し、でええいつ……て、あれ？ 消……？」

酷く、気分が悪かった。肉体からだよりも精神こころの方が、起きる事を拒絶しているように感じられた。深い深い沼に引きずり込まれていくような感覚だった。

……眠い、何も考えずにいたい。ああ、そうだ、眠ってしまったら良いのだ。そうすれば、こんな気分からも解放されるかもしれない。深く深く、引きずり込まれていく。そうして、孝弘はゆっくりと思考を放棄しようとして……

「アンギャババババ……！」

盛大に身体を痙攣させて、プスプスと煙を上げる事になった。

それを見て、御坂美琴は首を傾げた。どうやら衝撃の原因は彼女にあるらしい。美琴は手のひらからパチリと出ている電気を見ながら、口を開いた。

「あれ？ 今度は消えない。うーん、どこかで演算ミスしたのかな」「きつと偶々たまたまですね。それよりも、永末さんずっとピクピクしてますけど、お姉様、いったいどれくらいくらいの電圧を流されたんですの？」

ちようど隣に立っている白井黒子が聞いた。少し考えるような素振りを見せて、美琴は答えた。

「えっと、十万くらい？」

「じゅ、十万！？ 強すぎじゃありませんの！？」

「いや、違うわよっ？ 別に一万で効かなかったからムカついて十万にしたとか、そんなんじゃないからっ！」

「ムカついて十万にしたんですの！？」

これぞ『啞然』と言うような表情を作る黒子。どうも、彼女たちの常識は足して二で割ったらちょうど良い具合になりそうである。そんな気がする。と、そこで我らが主人公永末孝弘が起き上がった。やはり回復のスピードが尋常ではない。ただ、流石にノーダメージとまではいかなかったらしく、孝弘は覚束ない足元でなんとか立つと、思いつきり叫んだ。

「お前らは俺を殺す気か！」

なんかちよっと、真面目な発言だった。

「ったくよー、人がせつかくシリアスってたつてのによー。だいたい人を起こすのに電気流す奴が居るか、普通。お年寄りだったらシヨックで死ぬぞ。ていうか、そもそもアイツらは年上に対する礼儀ツちゆうもんが全くなつとらん。常識が無いんだよ常識が」

お前もな。ここに彼の友人が居たら間違いないくそう言つて肩を叩いていたであろうが、残念な事に、現在、孝弘は一人であった。

ふらふらと心もとない足取りで歩いていると、いつの間にか自分の寮に付いていた。守衛さんに挨拶をして、さっさと部屋に入る。

制服を脱いで部屋着に着替えた孝弘は、ぼすんと音を立ててソファに倒れこんだ。身体の疲れはまだ抜けきらない。

この分だと明日は筋肉痛だな。ったく、時々思うけど、俺の能力って本当に肉体再生で合つてんのか？

孝弘はそう考えて、憂鬱そうにため息をついた。もぞもぞと寝返りを打って、天井を仰ぐ。白熱灯の柔らかい明かりが目にしみた。

永末孝弘の身体検査の結果は、高校入学の頃から強能力者であった。学校で十数名、一学年に五、六名しか居ない強能力者の一人である孝弘は学内のホープでありながら、残念な事に、その能力故に大したアドバンテージを持っては居なかった。

それは、当然と言えば当然のことである。念動力者や風力使い、その他の雑多な能力者には個別に確立された時間割、カリキュラムと呼ばれる能力開発専用の時間がある。しかしながら孝弘の能力にはコレといった物が無かった。肉体再生とは文字通り自分の肉体を再生させるモノである。故に、まず破壊をしなければ開発もクソもないのだ。だけれども開発のたびにわざと怪我を作ったり身体を虐めたり出来るほど、孝弘は変態でも痛みに強くもない。

必然的に可能な開発の数は減っていった。また、彼の能力自体が、研究者が血眼になって調べ尽くしたがるほど希少な物でも、また、強力な物でも無かったことも、開発の手段を少なくする要因の一つだったかもしれない。まあ、こちらは孝弘にとっては僥倖だっただろう。無茶な開発をして何かあつては元も子もないのだから。

ただそれでも、マラソン、ボクシング、レスリング等、肉体を酷使用するスポーツは幾つかやらされた。打ち身や擦り傷、その他諸々の外傷は能力で治つたし、当然スポーツでもあるため、身体も鍛えられた。不良を前にして余裕を持って居られたのも、こういう経緯があつたからである。それはまあ、孝弘も感謝している。ただ少しだけ、妙な事もあつた。

傷は治るのに筋肉の疲労が取れないという、ちよつとした、本当に些細な違和感。他の肉体再生の能力者を知り合いに持たない孝弘には良く分からなかったから、こんなモノなのかも知れない、そう思う事になっていたが、納得出来ないというか、どこか腑に落ちなかった。

まあ、こんな風にウダウダ考えた所で、無駄なことも分かつている。

「……風呂、入るか」

ジジジと小さく音を立てる白熱灯をしばらく見詰めてから、孝弘はそう呟いたのだった。

大浴場には、時間の関係からか、あまり人が居なかった。といっても、まだ就寝には早い時間であるから、数人の人影はあった。孝弘は動かす度に悲鳴を上げる身体をゆっくりゆっくり動かして、なんとか湯船に浸かった。

ほう、とため息を一つ。ただの熱せられた水道水だから温泉のような大した効能は無いはずだが、それでも疲れが落ちていく気がする。

手足をブラブラと揺らして波を立ててみる。ぱしゃりぱしゃりと水が小刻みに揺れて身体に当たる。孝弘はなには無しに、そこに昔の幻影を見た。

『兄ちゃんっ、見て見て!』

『あん? 何を?』

『もう、分かんないかなあ。ホラホラ』

『……あっ!』

『えへへっ。分かった?』

『お前、太ったなぶべらっ!』

『サイッター! 普通女の子にそういうこと言っ!』

『問答無用で殴るお前もなかなかだと思っけど……』

『ふんっ。良いもん良いもん。お父さんに見せて来るから、もう兄ちゃんなんか知らない!』

『おお、そうかそうか。行ってこい行ってこい』

『ベーツだ!』

『でも、まあ、似合ってるぞ。その髪飾り』

『ふえっ? ……あ、え、うう……、なんでだろう。なんか素直に

喜べない。言って欲しかった言葉のはずなのに……』

『ハハハハ! 見たか、これがタカヒロクオリティだ!』

『要らないクオリティだね』

『何をう！？』

……そこまで思い出して、孝弘は溢れ出そうとする記憶に蓋をした。動かしていた手足を止めると、波も程なくして消えた。全く持った面倒だ。ここ数年、思い出すことなどほとんど無かったのに。あのバカげた夢のセイに違いない。

……本当に、面倒だ。だいたい、こんな重苦しい空気は自分には似合わないのである。誰かとバカやって、一人でもバカやって、何時でも何処でも笑って……。それが俺だ。俺様だ。それが、永末孝弘だ！

孝弘は両手で頬を張った。パチンと、情けない音が浴場に響く。そこで、孝弘は周りに誰もいなくなっている事に気が付いた。どうやら、結構な時間こうしていたらしい。孝弘はさっさと身体を洗って出る事にした。誰も居ない場所は、予想以上に気が滅入った。

「やって参りました土曜日！ 本日は半ドンでありまーす！」

孝弘は校門で叫んだ。隣を通る生徒らが、男子女子の垣根なく彼を避けて歩いていく。これ見よがしにヒソヒソと話をしているのが分かる。

「ねえ、あれ誰？」

「一年の永末……なんとかよ。我が校が有する強能力者の一人だつて、たしか前学校新聞でやってた」

「へえ。能力は何なの？」

「さあ。でも、大したのじゃ無いと思うよ。念動力とか、そこへんの在り来たりなヤツじゃない？」

「強能力者かあ……」

「うん」

「でも……」

「でも？」

「……全然見えない。ていうか、こうしていると馬鹿に見える」

「ああ、分かる分かる。強能力者かつこ笑、みたいなの？」

「そうそうそんな感じ！」

一組の女子生徒らがそんな会話をしながら通って行った。もちろん、昨今の女子高生は声が無駄に大きいから孝弘にも聞こえている。しかし、あれから約一週間、今日は待ちに待った土曜日である。そんな事で落ち込むほど、孝弘は柔ではない。

「むしろ快感だ！」

馬鹿なことをこれまた大声で叫んで、孝弘は自分の教室へと突貫していった。

学園都市の中高生は良くファミリーストラン、略してファミレスを利用する。ちなみに、ファミレスの料理は味付けが濃いモノが多い。それは詰まるところ、調味料をふんだんに使っているという事に他ならない。ということは、自炊でもしていない限り、学園都市の中高生は塩分過多だったり糖分過多だったりする訳である。

「これは由々しき事態だ。速くなんとかしないと」

我らが主人公、永末孝弘はその事実を重く受け止めていた。ファミレスで飯を食いながら。

「いや、分かってる。分かってはいるんだけどね。奨学金とか妙に安い値段とか、一度知ったらヤメラレないよね。何て言うんだっけこういうの。駄目人間製造機？ あ、お姉さん、このピザ二枚追加ね」

孝弘は凄まじい勢いで飯をかつ食らいながら合間合間に側を通る店員に追加注文をする。伝票はすでに五千円を超えていた。一人で五千円とか、ナニソレ怖い。

また、それ以上に注視すべきはこのような散財をしても生活出来ている奨学金の量、金額である。噂だが、どこぞの一番強い能力者



は奨学金だけです。億万長者らしい。孝弘も、まあそこまでは行かずとも、結構な金額を毎月もらっている。

「こういうあからさまな待遇の差があるからスキルアウトなんか出来るんだよ。ていうかアイツラの武器半端なくね？ 銃がデフォルトって何処の犯罪大国つか。あー、やだやだ、そのうち戦車とか持って来そう。あ、お姉さん、このチキンステーキとサイコロステーキ単品でお願いね」

ぶつぶつとぼやきながら、孝弘はさらに注文をする。いったいどこにそんなに入るのだろうか。吸収している量と孝弘の体積が明らかに比例していない。

こいつ、本当に人間か？ 身体の中にブラックホールでも飼ってるんじゃない……。店員のヒロコはそんな事を思い戦々恐々としながらも、営業スマイルを張り付けて伝票に新たにチキンとサイコロのステーキを書き足したのだった。

それからなおも食い続け、伝票がそろそろ一万に到達しようかと言うとき、孝弘はやつと箸を置いた。ごっそさんと咳いてから、ソファアの背もたれに身を預ける。

「げふつ。食った食った、もー入らんわ」

黙れ変態。それでも十分化け物だ。店員のヒロコは思ったが、口には出さなかった。そんな事をして妙な因縁を付けられたら困る。ヒクヒクと頬が痙攣するのを抑えて、ヒロコは綺麗な顔をしているのにどうにも残念な少年を見詰めていた。

ところで、孝弘がこれほどの食事をとるのにもちやんとした理由があった。勿論、能力関連の事だ。肉体再生とは、すぐに怪我が治るただの不思議体質ではない。AIM拡散力場により体の治癒力を高める、もしくは、拡散力場により傷を補填し、そこに周囲から持ってきた血液等を含む細胞を幹細胞化して無理矢理肉体として還元する、言うなればドーピングに近いモノである。

当然の事ながら、限界を超えて使えば副作用が伴うし、そうでなくとも、治癒には膨大なエネルギーが必要なのである。それを無理

矢理、それも短期間に行う再生能力は、エネルギー不足を頻繁に起こす。孝弘としては全くそんな実感は無かったのだが、食べれば食べるだけ入っていくから、まあ、そんなモノなのかも知れない。ようするに、孝弘はぶっ倒れたりしないように食事をしているだけなのだ。

しかし、ヒロコはそんな事を知らないし、知る由もなかった。だから孝弘が次に口を開いた瞬間、彼女の少年を見る目が人外を見るそれに変わったのも仕方のない事だったのである。

「じゃ、最後にデザート食うか、デザート。ジャンボパフェに杏仁豆腐にぜんざいに……、おっ、こりゃ新商品か。うーん、もういつそのこと全部頼んじゃおう！」

孝弘がそう言っただけでオーダーボタンに手を伸ばすのを見ながら、ヒロコは声に成らない悲鳴を上げていたのだった。

ちなみに、この約2ヶ月後、ヒロコはある暴食シスターを見て同じように悲鳴を飲み込む事になるのだが、それはまだ未来の話である。孝弘が暴食する理由を知り得なかったのと同じように、ヒロコはまだ、その未来が起こる事を知らない。

？ 其非永訣。不亦瑣末乎。（前書き）

久しぶりに投稿。今回は前作の改訂じゃなくて、新しく書き下ろしました。まあ、そのせいで時間が掛かったんですけどね。

？ 其非永訣。不亦瑣末乎。

【最初見た時は目を疑った。二度目は勝手に身体が動いた。三度目には別人なのだと理解した。それからは何故か、妙な縁が続いている。】

四月の初旬のこと。高校に入学して初めにある新入生課題テストなるモノが終わり、システムスキャン身体検査の結果を受けとって、これからゲームセンターにでも繰り出そうとしていた時だった。それは唐突に孝弘の視界へと侵入してきた。

風に靡く二房の髪。標準よりも少しばかり小さく、華奢とも言える身体。振り返った彼女の自分を見ているはずのない瞳、そこにある鋭い輝きを見て、孝弘は動きを止めていた。

まるで彼女の何かに見惚れているかのように、孝弘は彼女を見詰めていた。ただ一つ注意すれば、孝弘の中にあるのは恋愛感情のそれに近い物ではなく、驚愕に似た、叫びのようなモノだったという事。

モザイクでもかけられたかのようにピントの擦れていく孝弘の視界の中で、少女の姿だけが色鮮やかに抽出されていた。

力強い瞳が辺りを見渡す。一瞬だけ視線がかち合ったように感じ、孝弘は今一度息を呑んだ。世界が止まったような気がした。自分の呼吸の音すら聞こえなかった。生も死も、この世の全ての物が彼女の存在だけを残して遠い世界に旅だっているかのようにだった。

視線の先で、彼女が何事か、呟いた。

「おい、永末。どこ見てんだよ」

孝弘はハツとして後ろを振り返った。不思議そうな顔をして自分を見ている友人が居た。

「おい、大丈夫かよ。顔、真っ青だぞ？」

「え、あ。そうか？」

突然に色彩を取り戻した世界にしばしの間困惑しながらも、孝弘はもう一度少女が居た場所を見た。

しかし、そこに少女の姿はない。孝弘は目を見開いて数秒間その場を凝視し、辺りを見渡した。

「おいつて。マジで大丈夫か？」

傍らに立つ友人が、酷く心配そうな顔をしているのがちらりと見える。そして、見覚えのある後ろ姿が狭い路地裏へと入っていくのも、孝弘はしっかりと捉えていた。

「……悪い。今日の予定キャンセルで頼む」

「は？ 永末、お前何言つて……」

目を丸くする友人を視界の隅で認識しながら、孝弘は走りはじめた。少女の姿が路地裏へと吸い込まれていく。その姿を見失ってはならない。見失えば、ナニカが終わる。

孝弘は胸を掻きむしりたくなる程の焦燥感に駆られながら、人波を掻き分けた。少女の腕につけられた盾を模したような深緑の腕章が、光を反射して、一瞬だけキラリと輝いた。それが嫌に気になって、孝弘はまた少し、スピードを上げた。

白井黒子と永末孝弘。何の接点もないはずの二人の邂逅は、このようにして始まる。

それが未来に吉と出るのか凶と出るのか。はたまた、全く別の何かとなるか。それはまだ、分からない。

おそらくは何処かから都市を監視している”彼”も、世界の上足かみの天使らも、それを束ねる神ですら、彼を推し量る事は出来ない。

（いや、実際マジである。これは行き当たりばったり小説だから、設定だけが妙にしつかりしたストーリー即興物なのだ。つまり、作者すらこの先の展開を決めてなピーー……という事である。）

故に世界は回りだす。世界に認識される存在の中、ただ一人世界を認識する少年が、科学が治めるこの都市を、自らに気付かぬまま

で走り出す。

恐らくそれは、とても危険な事だろう。傷つき傷つけ血を流し、中途には死すら臥すかもしれない。ただ、彼はそれでも止まるまい。自らに気付かぬまま、自らを知らぬまま、彼は闇雲にでも走り続ける。だからどうか願わくは、願わくは彼の旅路が息災であらんことを……。

さて、文字数稼ぎ兼時間稼ぎはこれまでにして、肝心の孝弘に視点を戻す事にしよう。

路地裏に入って行った少女を追ってから数分。その姿を見失った孝弘は突き刺すような焦燥に駆られながら走っていた。

良く知らない道、別れ道に至る度に何度も迷いながら進む。恐らくは、もう会う事など出来ないだろうと理解しながら、それでも孝弘は足を止める事は無かった。

何が自分をそうまで掻き立てるのは分からなかったが、孝弘は少女を見つけないければ何か大変な事が起こると理解していた。それがどのような事なのかも、良く分からないまま。

「……っ、また行き止まりかよ。クソッ！」

数回目の袋小路。孝弘は少し乱れてきた息を整えながら、来た道を振り返った。蟻の巣のように入り組んだ通路に、苛立ちがどんどん募っていく。

くそつたれっ！ そう心中で怒鳴り、孝弘はまた走り出した。一つ目の別れ道に差し掛かる。右は大通りに繋がる、つまりは通って来た道、左は行き止まりだとすでに確認した。残るは真っすぐだけだと孝弘はそこを走り抜けた。

しかしその道もまた、何本もの通路に別れている。孝弘にはもうどう進むかで迷っている時間も余裕もなかった。速く速くと、得体の知れない何かが身体を突き動かすのだ。十字に分かれた岐路に立つて孝弘は苛立たしげに左右を見渡した。

どっちだ。右か左か、それとも真つすぐか。

孝弘は自分の不甲斐なさに吐き気がしてきそうだった。

何のために走っていたのか、そもそも、自分はその少女を見つけて何がしたかったのか、何をしようとしていたのか。もう諦めた方がよい。それに彼女はただ路地裏を通って近道をしようとしていただけで、この奔走自体が無駄なことかもしれないではないか。

そんな常識的な判断を理性が下していた。孝弘は打ちのめされたように視線を落とした。鉄紺色のズボンと、それと対を成すように白いYシャツが目に入る。何の変哲もない高校の制服だ。

そういえば彼女も、あの少女もまた制服を着ていた。あれは確かに、強能力者未満の入学が認められていない、常盤台中学の制服だ。孝弘はぎゅっと目を閉じた。一瞬だけ交差した強い意志の籠った瞳。あれが、何の目的も無く動く人間の眼のはずがない。それに彼女の右腕に付いていたあれ、あの腕章は……。

孝弘は一度大きく息を吸うと、目を開いた。まだだ。まだ止まるには早過ぎる。孝弘が再び視線を巡らして、眼前に伸びる三つの道を順繰りに睨みつけたその時だった。

左に伸びる道の先にある小さな建物、半透明の磨りガラスが嵌められたその窓の一つが、勢い良く砕かれた。

嵌められた。背後から勢い良く飛んできた”何か”が頬を掠め、窓ガラスを叩き割った時、白井黒子の頭の中にその言葉が響きわたった。

と同時に彼女は即座にその場を飛びのき、空を裂いて迫るナイフから距離をとる。服の裾が僅かに切られたが、気にしている余裕はなかった。黒子は更に二度ほど地面を蹴って、二つの人影から離れた。背後に居たものと、先程まで眼前で倒れ臥していたもの。

風紀委員の少女、白井黒子は小さなビルの三階にいた。廃棄され

たのか、まだ内装がなされていないだけなのか、こじんまりとした外観とは裏腹に、部屋の一つ一つは非常に広く感じられる、そんな建物だ。彼女が居るのは、その中でも一等広く、一等閑散とした雰囲気の部屋だった。

体勢を整え、追撃が来ないか警戒しながらも、彼女は鋭い眼光を今まで自分が立っていた所へ向けた。ナイフを振るった男がゆつくりとした動作で立ち上がる所だった。

所々破かれた服、乱れた髪に、口の端を伝い落ちる真っ赤な血。顔の横には殴られて出来たような痕すら見えて、それは、どうにも彼が暴行を受けたという風にしか見えない状態だった。ただ、その顔に浮かぶ愉悦の笑みと、右手に持ったナイフの不気味な輝きが、それが事実でないことを示していた。

黒子は射殺するように男を睨みつける。しかしその先で、男はケラケラと心底おかしそうに笑った。頬についた青い痣が不自然に歪み、口元の血もよく見れば不自然な光を放っている。

やはり、メイクだったようですね……。黒子は舌打ちして、隠し持った金属矢に指を伸ばした。身体を斜に構え、演算中の攻撃にも対応できるようにする。

男はひとしきり笑ってから、肩を竦めて言った。  
「ただのガキかと思っただらなっかなか良い反応するじゃねえか。つたくよお。おかげで切り損ねちまったぜ」

左手に握ったナイフを男はくるくると回して見せる。その横に、ため息を吐きながらもう一人が近寄った。

「バカが。だから何度も言ったはずだ。手を抜いた一発程度が、仮にも風紀委員ジャッジメントやってるような奴にあたる訳ないだろう」

こちらの男は、少なくとも手には何も持っていないように見えた。だが、先刻窓ガラスを割った”何か”のことを考えると、何かしらの能力を保有していると考えたほうが良い。少なくとも、ナイフよりはずつと危険だ。

黒子は頬の鈍い痛みをちらりと意識してそう考えた。出血自体は



そつでもないが、頬を掠めていつた何かは、確かに黒子の顔に傷を付けていたのだ。

「クハハツ。まあ、どうでも良いじゃねえか。いくら風紀委員ジャッジメントつづつてもまだガキみてえだしな。二対一だ。負ける訳がねえ」

「バカが。それも何度も言つたはずだ。油断すると痛い目を見る、とな」

男達は話しながら黒子に視線を向けた。ナイフの男も、言葉とは裏腹に隙のない構えを取つて彼女の一拳一動に気を配っているようだった。

黒子は知らず、舌打ちを打つていた。彼女としては油断していてくれた方が楽だったのだが、そう簡単にはいかないようだ。

嘘の通報で風紀委員ジャッジメントを呼び寄せるだけならまだしも、わざわざ傷つけられたようなメイクをしてまで不意打ちを敢行するだなんて……。一体何の為にこんな事をしているのかは分かりませんが、こんな事なら、初春の言つた通り応援を待つていれば良かったですわ。まあ、今となつてはどうでもいい事ですけど……。

そう考えながら、黒子は演算式の組み立てを完了した。相手が警戒している以上、背後に転移したとしても何らかの反撃を受ける可能性がある。故に、金属矢を使うのが最も効果的な制圧方法だと判断した黒子は、命に関わらない、しかし確実に動きを止められる位置へと狙いを定めていた。つまり、足の間接である。

「無駄でしょうけど、武器を捨てて投降することをお勧めしますの。そうすれば手荒な真似は致しませんわ」

指先のひんやりとした金属の感触を確かめたあと、黒子は男達に對して初めて口を開いた。と同時に、これが恐らくは全く意味を成さない事も彼女は理解していた。そもそも、計画的にこのような事が為されている時点で、彼等に『投降』の二文字があるはずがない。案の定、男達は一瞬不意をつかれたような表情をして、銘々に反応を返してきた。

「クハハハツ！ 面白えつ、手荒な真似だとよ！ デケエ口叩くじ

やねえか。何だあ？ その細つちい身体には無限のパワーでも詰まってるつてのなあ？ クフフツ、フハハハハ！」

「笑い過ぎだバカが。まあ確かに、このお嬢さんは自分の状況が理解出来ていないと見えるな。だがどうせすぐに分かる。自分がこれから、どうなるのか、な」

「……警告は、致しましたの」

笑う男達に届いているのかいないのか。黒子はそう呟き、金属矢を転移させようとした。『させよう』と、したのだ。

しかし、それは叶わなかった。彼女の目の前に迫る銀色の刃が、そうさせなかった。

「なっ!？」

黒子は驚嘆の声を上げ、身体をのけ反らせた。予備動作無しに投擲されたナイフは彼女の前髪を何本か持って行き、そのまま壁へと突き刺さった。

そしてナイフを躲した事に安堵する間もなく、彼女に次の攻撃が迫る。それは拳だった。先程の瞬間まで大声で笑っていたはずのナイフの男が、拳を振り上げて彼女の前に居た。

普段なら、大振りすぎる、と簡単にカウンターまで狙えそうなレフォンパンチだったが、のけ反って強張った体勢からでは反応するのが精一杯だ。何とか軌道から逃れ、黒子は地面を転がりながら男から離れようとする。

しかしそこにも追撃の手が迫り、黒子は体勢を整える間もなく更なる回避行動に移らざるを得なかった。転移して逃れる事も考えたが、その隙すらない。それになぜか、身体も重たかった。

おかしい。おかしいですの。確かに戦い慣れた相手のようですけど、こうまで好き勝手されるはずが……。

「考えごとかっ!？ 余裕じゃねえか、ツオラア！」

困惑し思考する黒子の僅かな隙をナイフの男は見逃さなかった。拳を振り抜いた状態から、それを戻す反動と同時に放たれた蹴りが、黒子の華奢な身体にぶつかる。しまったと後悔する間もなく彼女の

身体は空を舞い、床にたたき付けられていた。

「くっ……」

呻き声を小さく漏らしながらも、黒子は身体を回転させて衝撃を逃がし、その勢いのまま立ち上がるうとした。したのだが、勢いあまって、そのまま尻餅をついてしまう。

焦ったか。と内心舌打ちをして、彼女はすぐさま立ち上がるうと力を込めた。そして、また、ぺたりとくずおれた。

彼女の目が驚愕に見開かれた。その表情は、彼女が自分が座り込んでいる理由を理解出来ていない事を如実に現していた。

何故、何故だ。蹴りを受けたのは確かだが、打ち所が悪かった訳でも衝撃が予想以上だった訳でもない。実際、この程度の攻撃なら、訓練の時も何度か受けたし、その後の衝撃対処も悪くは無かったはずだ。なのに、なのに何故……。

「知りたいか、ジャケット風紀委員」

彼女の疑問を悟ったかのように、今まで後方で傍観していたもう一人の男が言った。キッと睨みつける黒子の視線にまるで堪えた様子も見せず、男はゆっくりと歩いて近寄って来る。

その様子を見て、ナイフの男はケラケラと笑って黒子から一步離れた。

「能力とは何か、考えた事はあるか？」男が言った。「AIM拡散力場がどうの、パーソナルリアリティがどうの、適用範囲がどうの……」

「それが、どうかしまして？」

見上げたまま答えた黒子の前に立ち、男は膝を折って彼女に目線を合わせた。澱んだ黒い瞳に見つめられて黒子は言い様のない嫌悪感を覚えた。

身体が自由でさえあったなら、こんな輩すぐにもぶん殴ってやりますのにつ！ そう考えるも、今ではもう腕一本持ち上げられそうにない。辛うじて体勢を保ち、倒れ伏すのを堪えている状態だった。

黒子の目の前で、男の顔がいびつに歪んだ。それはその男が初めて見せる心からの笑みだった。醜い嫉妬と愉悦の笑み。

「色々と研究が進んでいるみたいだが、能力なんてのは結局、思考力の賜物だ。活発に脳細胞を走り回る生体電流、ある学者はこれに注目して仮説を立てた。曰く、その脳内の電磁パルスが世界の素粒子レベルに干渉して現象を引き起こしているのではないか、ということだ。つまり、小規模なバタフライ効果というわけだな」

男は表情を消すように目を閉じた。再び開いた時、醜悪な笑みは影も無くなり、最初のような冷たい空気が泰然と存在していた。黒子の右腕の腕章をちらりと見た男の瞳にあつた燃えるような嫉妬の色だけが、男の心の底を表していた。

「まあ、この説が正しいのかなんてのは知ったこっちゃない。だが、能力がいわゆる脳みそに関係している事は周知の事実だ。俺は考えた。どうすれば能力者を無力化できるか。どうすれば化け物みたいな奴らを相手に生身で対抗できるか……」

男は淡々と言って、ポケットから何かを取り出した。霧吹き用のヘッドが取り付けられた小さな瓶だった。

「その答えがこれだ。これが何か分かるか？ ジャッジメント 風紀委員」

黒子は黙ったまま男を睨みつけた。鋭い眼光を送りながらも何も出来ない彼女を嘲笑い、男は霧吹きを一度空中に吹きつける。霧散するかと思われた水滴群はしかし、予想外にも男と黒子の中間点で静止した。

エアロハンド 風力使いか。いや、あの能力はモノを静止させるのには不向きだとなる……。

テレキネシス 「念動力……」 黒子は忌々しそうに顔を歪めて呟いた。

「そうだ。だが、別段珍しい能力でもないだろう？ 強度も2に届くか届かないか程度の軟弱なモノだ。ナイフの一つも満足に動かせんような、な」

「戦ったらオレの方が強えしなっ」

「黙ってるバカが。だからお前が戦闘要員で、俺が裏方してるんだ

るっ」

男は場を取り直すように息をつき、浮かせた水滴の群れをクルクルと回転させた。徐々に粒は薄いガラス盤のように平面に集まり、その形で回転を止めると男の手の平に収まった。

「もちろん、これはただの水じゃあない。即効性を追求した筋弛緩剤、言うなれば、麻痺毒だ。お前のその頬の傷もこれで付けさせてもらった」

効果の程は……、まあ、体感している通りだ。そう付け加え、男は水滴を変形させる。細く長く、鉛筆程の針のような形にされた水に光が反射し、チラリと煌めく。クリスタルに似た七色の輝きが一瞬だけ黒子の目を掠めていった。

「最初の挑戦でこうも上手くいくとは思わなかったが、順調なのは良いことだ。……さて」

男が針を持ち替え、黒子の目を見据えた。強い力を秘めた眼差しは、未だ気丈に男を睨みつけている。その強さが自分を見下す高能力者ドモのそれに重なって見えて、男は心の底の方でどす黒い感情が唸り上げるのを感じていた。

その目を止める！ 俺はお前らなんかに見下される程、落ちぶれちやいない！

言葉にすれば、そんな風に吐き出されたのだろうか。ただ、男はその感情を口に出すことは無かった。掲げるようにゆっくりと針を持ち上げ、男は苛立たしげに口を開いた。

「まずはその目から、潰してやる」

あやまたず針は真っ直ぐに黒子の右目へと迫った。そして、黒子の視界は塗りつぶされた。

ブスツ、という生々しく何かが刺さる音と、「あ」だか「え」だかを呟く小さな声だけが聞こえた。聞こえたような気がした。

？  
者有足孝悌。其愛弘而見愛於世。

グサリと孝弘の腹部に突き刺さった何かは、ゆっくりとその形を崩し元の液体へと戻っていった。ジワリと血がにじみ、真っ白だった服に赤のアクセントを加える。

吐息を漏らすような小さな声が背後の少女から呟かれる。腹に水の針を刺した男も、その後ろに控えるボロカスのような格好をした男も、酷く驚いたような顔で目を見開いていた。

「クツ……！」

刺された部分が燃えるように熱い。孝弘はその痛みにも歯を食いしばりながら、右拳を強く握りしめて眼前の男の顔に叩きつけた。

鈍い打撃音と同時に男の身体が僅かに飛びあがり、受け身を取る事もなく無様に床へと打ちつけられる。拳に響いた手応えからすると頬骨を折ってしまったかも知れないが、同情の余地など欠片もありはしない。孝弘はそう判断を下した。

何よりも、自分が間に割って入っていないければ、あの針は今ごろ自分の後ろで座り込んでいる少女に突き刺さっているはずだったのだ。治る自分とは違い、少女にとってそれは一生ものの傷になっていただろう。まあ、そういう一般的な見地からの怒りよりも、孝弘を突き動かしていたのはごくごく個人的な理由からの激情だったのだが、それを語る必要はあるまい。

「この野郎……、テメエどっから出て来やがった！」

と、その時、何かに襲われでもしたかのような格好をした男が、懐から取り出したナイフを構えながら怒鳴り声を上げた。孝弘は背後の少女の様子を確認しながら、腹部の傷に手を触れる。いつもよりは若干遅いが既に癒着も始まっている。この分ならそう大事にはなりそうにない。

少女はまだ驚きが収まらないのか、大きく目を見開いたまま口をパクパク動かしていた。何かを言おうとしているようにも見えたが、

残念ながら彼女の声に耳を傾けているような余裕などなかった。

高校一年、それも四月といえば、中学をようやく卒業したばかりの子供に過ぎない。いくら傷が治るといふアドバンテージがあったとしても、ナイフを使う相手に向かっていく勇気なんて、普通出て来るはずがない。切られれば痛みもあるし、即死に繋がるような部位を攻撃されたら、一巻の終わりなのだから。

ただそれでも、孝弘の頭に逃げるといふ選択肢はなかった。背に庇うようにした少女に、孝弘は大丈夫だと笑いかける。そして、自分に言い聞かせるように言った。

「心配するな。きつと助ける。きつとだ」

それから孝弘は少女が反応を返すまえにナイフを構えた男に向き直った。人を容易く傷つけられる道具を前に多少なりの恐怖を抱く。孝弘は気を落ち着けるように少しばかり思考を飛ばした。

先ほどの笑顔は引きつっていなかっただろうか。声は震えたりしていなかっただろうか。もしそうだったら、何というか、恥ずかしいことだ。構えだけを見ても随分デキそうな相手だし、こりゃあちよつと、危ないかもしれないな……。

「……ッ、何が可笑しい。この野郎！」

「あ？」

ナイフの男が再び怒鳴って、孝弘はようやく自分が小さく笑みを作っていたことに気がついた。少々の驚きと共に、心に少しゆとりが戻って来る。

なんだ。こんな状況でも笑えるのか俺は。我ながら、可笑しな奴だけ。

孝弘の顔にまた笑みが浮かんだ。こういうのを失笑と言うのだろうか。苦笑……じゃあないような気はするけど。

再度取りとめのない事を考え、それからふと思った。今なら、さつきよりも自然に笑えているかもしれない。今なら、さつきよりも堂々と言えるかもしれない。

孝弘は一度深呼吸して、振り返った。座り込んだ少女は先ほどと

ほとんど変わらぬ体勢のまま、そこに居た。

「大丈夫だ。必ず助ける。今度こそ、絶対だ」

白井黒子は朦朧とする意識の中で、その光景を捉えていた。同室の先輩に良く似た亜麻色の髪を持つ不思議な青年と、ナイフを持って振りかざす憎らしい男との戦いである。

それはお世辞にも洗練されているとは言えない代物だった。特に茶髪の彼の方に関して言えば、拳を握って振り回すだけの、まるつきり素人の戦い方だ。

ナイフが煌めくたびに、彼の白く新しかったワイシャツは赤に染まり、裂かれていった。戦力的にも、経験的にも勝ち目が有るようには思えない。実際、目の前では余りにも一方的な展開が繰り広げられていた。

……だが、実のところはどうなのだろう。これは本当に、一方的と言って良いのだろうか。

薬のせいで薄れてきた意識を必死でつなぎ止めながら、黒子はそう思考した。本当なら今すぐにもこの戦闘とも言えない戦闘に割り入って取り押さえない所だが、身体が利かない今、それは出来ない。

むしろ、横隔膜にまで回って来たらしい筋弛緩剤のせいで呼吸すら危うくなつて来ているのが実情だった。頬の傷が付けられてから、要するに薬が使われてから五分と経っていないのにこれである。もし心臓に毒が回りでもしたら、どうなってしまうのか……。

不吉な考えが一瞬頭を過ぎったが、黒子は纏まらない理性でそんな心配は無意味だと投げ捨てた。

今問題とすべきなのは、即効性を追求したという例の言葉通り、黒子がものの数分でこうなってしまうこと。そして、茶髪の男性がいまだ、動き回れていること。この二つだ。



あの薬剤を針という形で体内に直接ぶち込まれたにも関わらず、彼はそれを全く感じさせずに戦っている。

それを抜きにしても、あそこまで切りつけられれば普通、傷と出血のせいで動けなくなるはずだった。それは最早、気力や体力云々の問題ではない。脳が危険だと判断し、活動を停止させるのである。しかしその予兆すら、彼からは微塵も感じられない。

普通ならばとくに倒せているはずの敵が、満身創痍ながら立ちはだかり続ける。それはどのような気分だろうか。どうすれば倒せるのか分からないような敵を相手にナイフを振り続ける、その心境は……。

黒子が霞みはじめた視界と意識を持って余しながらナイフの男の心を推測しようとした、その時だった。茶髪の彼の拳が初めてナイフの男の体を捉えた。

ガードの上からとは言え、ある程度の破壊力を秘めた拳を打ち付けられて男の動きがわずかに止まる。その間に茶髪の彼の我武者羅な攻撃が二度、三度と男を襲った。急所だとかガードの合間だとか、そんな物を度外視したパンチだった。

「ぬ、又アアアア！」

堪り兼ねたように男が大きくナイフを一閃する。とっさに身を翻すも、青年は腹部を大きく裂かれてしまった。決して少なくはない量の鮮血が飛んで、また彼の服を赤く濡らした。

ふらつくように数歩後退して膝をつく茶髪の青年の姿に、黒子は声にならない悲鳴を上げた。まずい、今度こそ終わりだ。あの血の飛び方では、傷が内臓にまで達している事は想像に難くなかった。早急な処置を施さなければ命に関わってしまうだろう。

半ば確信に近い推測でもって、黒子はそのような事を考える。ナイフの男も、恐らくは同じようなことを思ったのだろう。荒い息を吐き出しながら、安堵したように笑っていた。

しかし、男は数瞬のうちにその顔を驚愕で染めることになった。黒子もまた、驚きに目を見開く。茶髪の彼がしたように今度は男が

数歩退き、悲鳴のような怒鳴り声を上げる。

「何だお前は！ いったい、いったい何だつてんだよ！」

視線の先で、茶髪の青年がゆっくりと立ち上がった。放っておけば間違いなく致命的な傷だったはずの腹部の裂傷。それを数秒間抑え苦しそくに深呼吸をしたかと思うと、彼は立ち上がった。そう、おもむろに立ち上がったのだ。

ワイシャツが吸い取りきれなかった血液が、ベルトの金具を伝ってポタリと地面に落ちる。傷は決して浅くはなかった。血も、全身が真っ赤に染まるほど、流れている。

何故、何故立ち上がれるんですの……？ 黒子は浅い息を繰り返しながら、自分と彼とを比べていた。傷だらけになりながら戦い続ける彼と、立ち上がれもしない自分とを。

薬が効かなかったのだろうか。体内に直接混入されたのに？ 痛みを感じないのだろうか。あんなに苦しそくに顔を歪めているのに？

次々と浮かんでくる疑問に、黒子はさらに問いかける形で答えていく。しかしながらそれは堂々巡りに終わり、結局はやはり、何故立ち上がれるのかという疑問に突き当たるのだった。

立ち上がった茶髪の青年が、荒い呼吸を整えるように大きく息をしながら拳を構えた。対して、ナイフの男は気圧されるようにまた一歩後ずさる。男の顔からは、すでに戦う気概は感じられなかった。不毛な戦いに恐怖を抱いたのかも知れない。

そうして、どちらも動かずに睨み合ってからしばらく、黒子の耳がサイレンの鳴る微かな音を捉えた。警備員アンチスキルのパトカーの音だった。

孝弘は全身を襲う倦怠感に耐えながら、必死で拳を前に構えた。いくら素人そのままだと言っても、孝弘も思考能力に関して言えばレベル3保持者のそれに相応しい、もしくはそれ以上のモノを有している。既に数回の攻防を繰り返して、効率の良い戦い方ないし構え

は大方把握できていた。

とはいえ、傷の回復の演算による脳への負荷と、出血過多による身体への負担とで、手足の動きは著しく鈍化していた。なにより、先ほど腹部に受けた傷が宜しくなかった。目も少し霞んで来ているし、耳もまた、自分の心臓の音と息遣いの音しか拾ってくれなかった。

先ほどまでは何とか拮抗できていたけれども、これでは勝つどころか、苦戦させる事すら難しいに違いない。

孝弘は荒く乱れた息を肩でしながら、男を睨みつけた。足が動かない事を隠すための苦肉の策だったが、それが功を奏したのか、男も額にしわを寄せて孝弘を睨み返してきた。

重い沈黙が幾秒か続いた。おかげで少しばかり気力を回復した孝弘は、最後の特攻だとばかりに体に鞭を打ち、飛び込もうと身体を沈めた。

そして、まさに飛び出そうとしたその時、男が弾かれたように外を見やり、苦々しげに顔を歪めた。予想外の動きに、とっさに突撃を止めてしまう。急制動で掛かった負担から、足が小刻みに震えた。再びこちらに振り返った男が、ナイフを差し向けながら何事かを叫ぶ。必死な形相で口を金魚のように動かす男に、孝弘は少しばかり顔をしかめた。何を言っているのか、孝弘には酷い耳鳴りのせいで分からなかった。

暫くしない内に、男はまた外を見やった。焦りからか、今まで一滴もかいていなかった汗のようなものが頬を伝っていた。それから、一步一步と後退を繰り返しては、孝弘を睨んだ。

何をするつもりなのか。孝弘は訝って、もう一度身構えた。ナイフを投げてくるつもりなのかかもしれない、そう思った。そして、その予想は確かに当たった。男は懐からもう一本ばかりナイフを取り出すと、二本まとめて孝弘へと投擲し、逃げ出したのだ。孝弘は疑問符を頭に浮かべた。どうして逃げるのだろうか。ナイフは大して狙いを定めていなかったのか、孝弘の脇を通り抜けて転がった。

それと同時に、急速に意識が朦朧としはじめた。敵を目の前にしている状態が一転して、気が抜けたといっても良い。耳鳴りも少しずつ収まり、テレビのポリウムを上げるようにして世界に音が戻って来た。

ああ、成る程。孝弘はガクリと膝を付きながら納得してもう余り明確ではない意識を外にやった。パトカーのサイレンの音がもう間近まで迫っていた。どうやったのかは分からないが、この場所へと向かって来ているのに違いなかった。

それから最後の気力を振り絞って、孝弘は少女の方に顔を向けた。呆然と言うのが正しい表情で座り込んだまま、彼女はこちらを見ていた。

孝弘は自然と笑みを浮かべていた。どうやら、助けられたらしい。こんな自分でも、身体を張れば守れる、守れたのだ。それが嬉しかった。

孝弘はもう大丈夫だと口を開こうとして、目を見開いた。駄目だ、ヤメロ。そんな声が頭の中に響いた。

「……まだだ」僅かに変形した顔を憎しみで染め上げながら、孝弘が殴り飛ばした男が立っていた。

「まだ、終わらせん……」

男はそういつて、ナイフを振り上げた。座り込む少女の背後から、その彼女へと狙いを定めて、まるで、孝弘が彼女を守ろうとした努力は全て無駄だったのだと、そう言わんばかりに。

世界が嫌にスローモーションだと感じたことはないだろうか。全く予期していなかった何かに直面したときや、身体がどうしようもない危険に曝されたとき、そういう場合に起こる事があるあれだ。

学者曰く、それは危機的状況の回避の為に脳が演算速度の制限を一時的に解除することで起きているらしい。真実かどうかは定かではないが、電磁パルスが異常に脳内を駆け巡っているのは事実である。

走馬灯も実はそれが原因で、人生の全ての状況から現状に役に立つ知識を探すために脳が無理矢理思い出させている、というのは、有名な話だ。

何を言いたいのかというところ、つまり孝弘もまた、その時世界をコマ送りで見ていたのである。

色々な事が頭を過ぎっていた。友人との雑談などの全く関係のない、下らない事、この町に来るまでの、退屈で幸せだった日々の事。そして、ツインテールを揺らしながら、寂しそうに笑う少女の姿が脳裏に浮かんだ時、孝弘の意識は真っ白に染まり上がった。

それはちょうど男がナイフを振り下ろしたのと、全く同時だった。

「……………え？」

黒子は嫌にはつきりとした声でそう呟いた。ピチャリピチャリと血が頬に滴る感触を鮮明に覚えた後で、くずおれるように身体にのしかかってくる彼の血まみれの身体を、彼女は抱き留めるようにして受け止めた。

「あ、ああ……………」

目に入るのは、頬を殴られて地面に横たわる男と、その男に刺されて顔を歪める青年の姿だった。それはあたかも最初彼が現れた時の状況をもう一度再現しているかのようだった。

違うのは、青年に突き刺さっているのが液体で出来た細い針などではなく、物を切り裂く事に特化した鈍色に輝く刃物であること。そして、刺さっている部位が、喉元であること……………。

「……………何故、何故ですの？」

黒子はずりずりと力を失っていく青年の身体を支えながら、そう問い掛けた。血まみれの青年は答えることなく、黒子を押しつけた。されるがままに黒子は彼の身体を地面に横たえさせて、怖ず

怖ずとその喉　ナイフが深々と突き刺さっているそこ　を見た。  
その視線の先で彼はけだるそうに喉元のナイフに触れ、それを引き抜いた。あ、と呟いたのは自分だったのか、それとも心の中の声が聞こえたただけだったのか。

湧き水がごとく勢い良く流れ出した血が喉全体を赤く染め床を侵食していく。その様子を、黒子は呆然と見つめていた。

いつの間に彼が黒子の後ろに回り込んで男の凶刃を止めたのか、そもそも、何故こうまでして彼は自分を守ってくれるのか。

本人に聞かなければ分かりえないような疑問ばかりが黒子の頭を占領していた。だからだろう。黒子は自分の身体が『動く』事に、その異様さに気付いていない。青年に触れられるまで、指先一つ動かす事すら困難だったというのに……。

コヒュツと空気が抜けるような音がしたかと思うと、青年が喉にパツクリと開いた傷を押さえて笑った。コポリと口元から血がこぼれ落ちたが、彼は気にした風もなく、笑っていた。

まるで自分を安心させようとしているみたいだと、黒子は感じた。助けられてばかりの自分が情けなくて、泣きたくなった。

「なんで……、どうしてこんな事を……」

黒子が震える声で言うと、彼は応えようとして、咳込み、血を吐いた。飛び散るように上がった赤い液体が黒子の顔に掛かって、それを慌てて拭おうと喉を押さえているのは逆の手を伸ばした彼は、困ったように眉根を寄せた。その手もまた、血で汚れていた。

黒子は無性に声を上げて叫びたくなかった。言葉にはならないその叫びを喉元で無理矢理に押し止め、黒子は青年の手を取ってその胸に掻き抱いた。制服が血で汚れ、青年も驚いて手を引こうとしたが、彼女は気にすることなく抱きしめた。

すると、彼は、今度は小さく苦笑して彼女を見つめた。ゴメンナ、と、掠れるほどに小さな声が口から漏れた。

違う、違うのだ。彼が謝る事ではない。彼が受けた傷は全て、間違いない自分に責があるのだ。相棒の忠告を無視して独断先行した

あげく、不様に敵の術中に嵌まって、関係のない彼まで巻き込んだ。そうだ、責任は全て自分にある。彼が謝る事ではない。そのせいで死にかけている彼が謝罪する事なんて、これっぽっちも……。

黒子は青年の言葉に首を振りながら、涙を零していた。ぽたりぽたりと床に広がる血の海に、その涙は呑みこまれて消えていった。青年が慌てたように瞠目して、また咳込んだ。

「……大丈夫、大丈夫ですよ」

黒子は涙を噉りながら言った。誰に向けて言ったのか、本人ですら曖昧な発言は、青年にはどう聞こえたのだろうか。

彼は少しばかり心配そうに黒子を見つめると、安心したように笑った。それから、眠るように意識を失った。

「……必ず、助けますの」

黒子が呟くのに合わせるように、サイレンが大きく鳴った。

孝弘は夢を見ていた。小さな小さな女の子が寝台車に乗せられて、手術室へと運ばれて行く夢だ。

少女は呼吸機から酸素を受け取りながら、苦しそうに少年へと手を伸ばしていた。口元をパクパクと動かして、その少女は少年に何かを告げようとしていた。音にならない声だったが、少女の言葉は孝弘の頭に強く響いた。『お兄ちゃん』と、間違いなく彼女はそう言った。

「大丈夫、大丈夫だ。きっと助かる。また助かるからっ」

少年が涙を両目一杯に湛えながら、そう応えた。無根拠に、うそぶくように、祈るように。

少年が伸ばされた手を握ろうとした時、看護師たちが煩わしそうに彼を押し退けた。掴もうとした手は空を切り、所在なさ気に握られた。

空気を圧縮したときみたいな音がして、手術室の扉が閉まった。手術中だと知らせるランプが唐突に赤く光った。少年はその場に立

ち尽くしたまま、扉を見つめていた。

「大丈夫、大丈夫だ。大丈夫」

それ以外の言葉を忘れてしまったように、少年は咳き続けた。力タカタと震える肩を押さえ付けるように両手を回したら、今度は齒が音を立てた。

「大丈夫だつて、言ってよ……。カミサマ」

少年が絞り出すように言った言葉を聞いた人間は、その場に居なかつた。ただ、夢を見ている孝弘を除いて……。

ああ、昔のお前<sup>オレ</sup>よ。お前<sup>オレ</sup>は何て無力な奴だ。伸ばされた手を掴んでやる事も出来ずに、ただ誰かに縋るだけだ。

ああ、昔のお前<sup>オレ</sup>よ。お前<sup>オレ</sup>は本当に無力な奴だ。大切な少女の苦しみ一つ取り除いてやれないのだから。

「なら、今のお前<sup>オレ</sup>は……」青年が顔を上げた。「今のお前<sup>オレ</sup>はどうだ。縋るだけではなくなつたか。何が行動を起こしたか。誰かの手を握つてやつたか。苦しみを取り除いてやれたか」

青年が糾弾するように声高に孝弘を責めたてた。

「助ける事が出来たなら何故あのときそれをしなかつた。見捨てたのか、助けたくなかつたのか、お前<sup>オレ</sup>は！」

「違う！ そんなんじゃない！」

「違わないさ！ お前<sup>オレ</sup>は知っていたはずだ。あの時だつてやろうと思えば出来たんだと、お前<sup>オレ</sup>はきちんと理解していたはずだ！ そうだ、つまりお前<sup>オレ</sup>は、あの娘を見捨てたのだ！」

「うるさい、黙れっ！ 違うつたら違う。違うんだ！」

少年が叫んだ。目を閉じ、耳を塞ぎ、しゃがみ込んで身体を小さくして、少年は青年の言葉から逃れようと頭を振った。

そして、唐突に青年の姿が消えた。病院の廊下だった風景までも流れるように病室へと移り変わった。だが、少年はまだ、辛そうに身体を震わせていた。

「お兄ちゃん。ねえ、泣いてるの？」



真っ白なベッドの上の少女が心配そうに言った。孝弘は震えながら、首を振った。

『俺は、助けられたのか？ 助けようとしなかっただけで、その力はもう、持っていたっていいのか？』

『お兄ちゃんは、どう思うの？』

『分からない、分からないんだ。俺はただ必死に、必死に……っ』

『でしょう？』少女が笑った。白い病院の中でも、一際清く純白な笑顔だった。『私は知ってるよ。お兄ちゃんがした事、しなかった事、したかった事も、したくなかった事も、私は全部知ってる』

少女はそこで息をつくつと、四角く切り取られた小さな窓に手を伸ばした。届かないはずのガラスに、少女の手が触れた。

いつの間にか彼女は海を見渡せる展望台の手摺りに手を置いて立っていた。二房にまとめられた長い髪が風にまかれてふわりと舞った。

『お兄ちゃんは気付いてなかったただけなんだよ。知っていても、持っていない、気付く必要は無いのと一緒に。だから、お兄ちゃん……』

少女は振り返り、言った。その胸にはポツカリと、大きな穴が空いていた。

『次は、見捨てないでね』

孝弘は叩き起こされたときのように一瞬にして意識を覚醒させた。嫌な汗が体中をのたうっている。その感触に眉をしかめつつ、寝かされていた簡易なベッドの上で身体を起こした。

そこは病室というには余りにも生活感に溢れた場所で、誰かの部屋というには少しばかり生活感に欠ける場所だった。

「……どこだ、ここ」

口を開いた途端、喉がズキリと痛んだ。慌ててそこに触れると、布、恐らくは包帯だろう物が巻かれていた。

そういえばナイフをぶつ刺されたんだっただか。孝弘は痛みに顔を

しかめながら包帯を外した。気絶していたせいで再生能力が完全に働かなかつたらしいが、もう少しもしない内に治るだろう。

まとめるのも面倒だったので解いた包帯をそのままベッドの上に置き、喉の傷を摩りながらベッドを降りようとした、その時だった。「な、何をなさってるんですのっ!」

二つに分けられた髪が孝弘の視界を舞った。孝弘は小さく息を飲み込んでいた。しかし、すぐに気づいた。彼女は違う。どんなに似ていても、瞳の強さまでもが瓜二つでも、彼女は違うのだ。

「いくら何でも、まだ起き上がってはいけませんのっ。お医者様も驚くくらい出血だったんですのよ」

少女は孝弘に走り寄るなり、驚いたような、泣きだしそうな、そんな表情で言った。孝弘はそれが少しおかしかった。

「ああっ、包帯まで外してっ!」

慌てふためき今度こそ涙を浮かべそうになっっている少女に、孝弘は場違いだと感じながらも、声を上げて笑っていた。

「あ、貴方っ、何がおかしいんですの!」

やはり違う。こんなにも、違う。この少女とアイツは全くの別人なのだ。

顔を真っ赤にして抗議を始めた少女に、今度は孝弘が涙腺を駆け登る熱を感じていた。孝弘はそれを笑い過ぎて出てきたかのように見せかけて、目元を拭った。

「いや、悪い。こりゃ少し、失礼過ぎた」

「ふ、ふんっ。わかれば良いんですの。わかれば」

少女は赤い顔をそのまま逸らして壁の方を見た。それから少しばかり沈黙があった。その間に何とか感情の波を押さえ付けて、孝弘は口を開いた。

「怪我は……。怪我は、しなかったか?」

「……あのですね、普通、メツタ斬りにされた人がそれを聞きますの?」

少女は小さくため息をついた。

「まあ、お蔭さまで大きな怪我はしませんでしたけれど」

「そっか。そりゃあ良かった」

「良くなんかありませんわ！ 何度も言いますが、本当に危なかったんですのよ。もし貴方、自分が死んでいたらどうするつもりだったんですの!？」

「死んだら何も出来ねえと思うけどな」

「そういう事を言ってるんじゃないやありませんの！」

憤慨したように叫ぶ少女に孝弘は苦笑を零して言った。

「そう興奮するなよ。結果的に、生きてんだからさ」

「それは、確かにそうですね。わたくしが言いたいのは、そういう事では無くて……」

少女は尻窄みに声を小さくしたかと思うと、俯いてしまった。それからまた、沈黙が降りた。孝弘は苦笑を微笑みに変えてその顔に浮かべていた。この少女はどうやら、とても優しいのだと思った。

「永末孝弘だ」

「……は？」

「名前だよ。永末孝弘、能力は肉体再生オートリパース、まあ、怪我がすぐ治るだけの能力さ」

「あ、はい。レベル3ですわよね。失礼だとは思いましたが、書庫ブックで確認させて頂きましたわ」

「ふうん。そうか」

「わたくしは白井黒子と言いますわ。レベル4の空間移動能力者テレポーターですの」

「そうか」

孝弘はそれを聞くと、ニッコリと笑った。

「これからよろしくな、黒子」

【最初見た時は目を疑った。二度目は勝手に身体が動いた。三度目には別人なのだと理解した。それからは何故か、妙な縁が続いている。】

彼等の『妙な縁』は、このようにして始まった。そして、世界は何者かの予測を超えはじめる。

孝弘はまだ気づいていない。ゆえに彼は使えない。持っけていても、気づかなければないのと同じだ。

彼はまだ、自分の事を把握できていない。しかし、出来ていなくとも、彼は強くあろうとする。そしてそれが、世界を変えていく。

だからきつと、彼が自らを認識したとき、世界は既に、変わっているだろう。

？  
者有足孝悌。其愛弘而見愛於世。（後書き）

更新遅れてすいません。久しぶり過ぎて忘れられてるんじゃないでしょうか。がくぶるモノです。

さて、今回のお話は過去編であると同時に、今作品の主役、孝弘君の基本設定がわずかながら織り交ぜられています。

まあ、そんなのは抜きにして楽しんで頂けたら幸いなのですが、視点変更が多すぎるかなと思いました。

ご意見ご感想、お待ちしております。

？  
銀行強盗ってだいたい失敗するよね。

五月十一日午後二時頃、学園都市某所にて銀行強盗が発生する。しかし、金銭は一切盗まれず、怪我人及び死亡者も無し。聞く所によると、犯人は自分から武器を捨ててしまったという。

この不可解な事態は何故起こったのか。我々取材犯はその原因を解明するべく、強盗現場に居合わせた少女に直撃取材を敢行した。「不思議な人でした」

少女は我々に対して、開口一番、そう言った。我々の内の一人が質問した。

「不思議な人……とは？」

「男の人でした。その人が急に立ち上がったかと思うと、強盗と話を始めたんです」

少女は思い出すように目を閉じ、記憶を確かめるように続けた。

「特に何をしたってという訳では有りませんでした。ただ、こちらが目を覆いたくなるような……、罵言雑言と言うんでしょうか。それをです、マシガントークのように並べ立てたんです」

我々の間に疑問符が浮かんだ。「罵言雑言？」我々の内の誰かが聞く。いや、聞いたと言うよりも、それはある種の確認であったように思う。つまりは、我々は少女の言葉を聞き間違えたと思ったのである。しかしながら、少女はしっかりと首を縦に振った。

「はい。罵言雑言です。友達の言葉を借りれば、悪口滅多差しというヤツでした」

今度こそ確実に我々は困惑した。そんな事をすれば犯人は激昂し、それこそ怪我人が出てくるのではないかと。少女もまた同意見だったようで、再び頷いた。

「ええ、私も最初はそう思いました。実際に、犯人は彼に向かって発砲しようとしていましたし、私の周りに居た人たちも、彼はきつと見せしめに殺されるだろうと確信していました」

でも違つたんです。と少女は続けた。それから少しの間沈黙があった。我々はごくりと唾を飲み込み、少女が口を開くのを待った。私のペンを握る手はじつとりと汗ばんでいた。

程なくして、少女は思い出したように目を開くと、何も置かれていないテーブルを見て言った。

「……ちよつと、喉が渴きましたね。麦茶ならお出し出来ますが、どうですか？」

我々はお構い無く、とその申し出を辞退した。それよりも、話の続きを聞きたかった。しかしながら、少女は我々のそれを遠慮と受け取ったのか、麦茶を注いで持ってきてくれた。それを見たとき、我々は喉が渴いていた事を実感した。一度断っておきながらどうかとは思つたが、結局我々は麦茶に手を伸ばしていた。冷たく冷やされた麦茶は、いっそう美味しく感じられた。

そうして、我々が喉の渴きをいやしてから、少女は再び口を開いた。

「どこまで話しましたっけ。えっと……」

悪口を言つて、銃口を向けられた所までだ、と誰かが言った。

「ああ、そうでした。それで、犯人の男の人が彼に向かつてこう言つたんです。お前に俺の何が分かるつ、て。彼はこう答えました。分かる訳ないだろう。それとも何か、お前は見ず知らずの他人であるこの俺様に全て分かれてしまうような薄い人生を歩んできたのか」

少女はまるで物語を読んでいるかのように淀みなく話した。ところどころ声色を使つて話していて、我々に分かりやすく説明してくれているのが分かった。余談だが、この少女は大能力者であるらしい。やはり、頭の中で整理する速度が我々とは違うのかもしれない。私的の外れな事を考えていると、少女はクスリと笑った。

「それからは凄かつたですよ。自分で言うのも何ですけど、わたし頭は良い方なんです。でも、彼の場合は頭が良いとか悪いとかそんな次元じゃなくて、まるで良く出来たテレビドラマを見ているみた

いでした」

少女はそこから身振り手振りを交えて我々に説明を始めた。憧れのヒーローについて語る少年のように、少女の目は輝いていた。不甲斐ない事ではあるが、我々もそれに引き込まれたかのように、少女の話に耳を傾けていた。そして、とうとう少女の話も佳境に移った。

「……きっとアンタは優しいんだ。ここにいる、誰よりも。彼が言ったその言葉で、犯人の目に涙が浮かびました。その頃には私たちも犯人とその男の子の会話に魅せられていて、銀行員の人ですら、犯人に同情しているみたいでした。それから犯人の人が銃を降ろして聞きました。俺はまだ、やり直せるだろうか」

私の後ろの方で嗚咽の声が聞こえた。この声は新人の前山くんだろう。犯人の男に同情しているのかもしれない。バカな事を、とは思わなかった。むしろ、それも仕方ない事のように思えた。現に私も、一個人としては犯人に同情していたから。

「そのとき彼はその問いに答えませんでした。答えられなかった、というのが正しいのかも知れません。ちょうどその時、ジャツジメントの女の子がやってきたからです。ただ、犯人のひとはそれを見た後、反抗も何もせずに捕まりました。怪我は有りませんでした。私たちは保護され、一人一人、アフターケアを受けるためにそこを連れ出されました。だから、私がそとに出た時に彼の声を聞いたのは偶然でした。彼は連行される犯人の男の人に向かって、叫んだんです」

少女はそこで微笑みを浮かべて、窓から空を見上げた。

「きっと大丈夫だ。死にたい時に死ねるように、人は、望めば何時だって生まれ変わるんだから……と」

それから少女はポツリと、溢すように呟いた。格好良かったなあ。その言葉は年相応の感慨を表しているような気がして、私も少し、胸が熱くなった。世の中には誤った道に進んだ人間を正してくれる人がいる。それはなんと素晴らしい事だろうか。暴行や事件が良く



起こる学園都市だが、このような人間が居るのなら、それほど捨てたモノではないのかもしれない。

私は年に似合わず、少女の横顔にそんな事を思った。ふと見た窓の外で、白い鳥が飛んでいった。

「なあにが『死にたい時に死ねるように、人は、望めば何時だって生まれ変わるんだから』ですの。良くもまああんなこつ恥ずかしい台詞を大声で言えたもんですわ。聞いているこつちの方が恥ずかしくなりましたの。貴方、羞恥心が欠如しているのではなくて？」  
「……黒子くん。別にツンデレについてどうこう言うつもりは無いんだよ。無いんだけどさ、俺様今回なんか悪いことしたっけ？ むしろ良い事じゃない？ 犯人の説得とか、褒められてしかるべきなんじゃない？」

風紀委員第177支部。いったい何個支部があるんだ、とかいう疑問はさておき、犯人逮捕に協力したはずの永末孝弘はなぜか白井黒子に罵倒されていた。

「黙りなさいですの。防犯カメラの映像を見させて頂きましたけど、今回は運が良かっただけで、もしかしたら撃たれていたかも知れなかったんですのよ。そうなったら貴方、一体どうするつもりでしたの？」

「うっ。で、でもさ、結局何も無かつたんだし」

「シヤラップ！ そもそも、永末さんは何にでも首を突っ込み過ぎなんですの。一般人なんですから、もうちょっと一般人らしくして頂きませんか」

頂垂れる孝弘。おかしいなあ、今日は待ちに待った半ドンの土曜日で、楽しい楽しい1日になるはずだったんだけど……。最近ちょっと付いてないような気がするんだ。具体的には、五月に入ってから。もっと細かく言えば、先週、御坂美琴にビリビリされてから。

そう考えていると、黒子がバントツと机を叩いた。

「もし、永末さん、ちゃんと聞いてますの？」

「聞いている聞いてるー。バッチリさー」

「聞いてませんわね!？」

大根役者も真つ青な大根つぷりを披露する孝弘。ところで、この表現はおかしい。大根役者も笑い出す、の方が正しいが、ナレータ―はあえて文章の書きなおしをしない。なぜなら、面倒だからだ!と、そのあまりにも棒読みな発言に黒子が怒鳴ったその時だった。鈴を転がしたような、それでいて猫の鳴き声も彷彿とさせる甘い声が聞こえた。

「永末さん、白井さんはこれでも心配して言ってくれてるんですよ、きつと。あ、お茶どうぞ」

「聞いている聞いてるー。バッチリさー。……え? なに、お茶？」

あ、なんだカザリンか。サンキュ」

見ると、頭がお花畑な少女、初春飾利が立っていた。どこか間の抜けた笑みは、彼女の性質をそのまま表しているようだ。

「……そ、その表現だとわたしが頭の可哀想な人みたいです」

苦笑いを溢しながら彼女が言った。こういう発言も、どこかしら抜けていると孝弘は思う。が、しかし侮ってはいけない。何を隠そうこの少女、白井黒子と同じく風紀委員なのである。まあ、でもなければこの場に居るはずもないのだが、そこには突っ込まないでほしい。ちなみに、頭が花畑というのも頭に花飾りを載せているだけで、頭の中身がパツパラパーだという訳ではない。

孝弘にとって問題なのは、風紀委員になるのに「9枚の契約書にサイン」「13種類の適正試験」「4か月に及ぶ研修」という物があり、なおかつ彼女がそれを既遂しているという事実だった。実際は情報処理能力を買われての一点突破であるのだが、知りあって日の浅い孝弘はそんなことは知らない。

つまり、現在孝弘の脳内では白井黒子と初春飾利のパワーバランス、もとい物理的破壊力および戦闘能力は等しいと成って……

「いやあ力ザリンはムツチャ可愛いなあ。なにこの頭、狙ってんの？ 弄られるの狙ってんの？」

「や、やめてください。お花が、お花が散っちゃいます〜」  
「……いないようだった。」

このう、このうっ、可愛いこのう、ホンマに可愛いこのう。孝弘は飾利の頭をもてあそぶ。そのたびに、彼女の頭の花飾りからパラパラと花びらが散った。あわあわと、頭をいじくる孝弘の手に自分の小さな手を重ねて動きを止めようとするが、孝弘の手は止まりそうにない。いかんせん、彼女の身体能力では難しい物があるようだった。そんな孝弘の姿を見て、黒子は人知れずため息を吐いていた。

「……この人は、本当にもう……」

優しすぎるお姉様、それと同じように優しすぎる永末孝弘。しかし、二人には決定的な違いがある。お姉様は、御坂美琴はレベル5の超能力者なのだ。それはつまり、学園都市で最強の部類に入るといふ事でもある。正義感が強くて、時々風紀委員の活動。それも危険なモノばかり。に関わろうとするのは困りものだが、それだつて力があるから出来ることなのだ。

けれども彼は違う。能力はレベル3の肉体再生だから、確かに大抵の怪我は治るかもしれない。でも、違うのだ。それは圧倒的な力ではない。相手が明確な殺意でもって彼を殺そうとするならば、頭か心臓を狙うだけで十分なのだ。それこそ言葉通り”一発”で彼は死んでしまう。

……そう。彼は違うのだ。あの日だつてそうだった。美琴のような次元を越えた強さを全く持っていないから、彼は黒子の代わりに怪我をしてしまった。彼は、少し体が頑丈で、ちょっとトラブルを引き寄せやすい體質をしているだけの、普通の学生なのだ。

ですから、あまり無理はして欲しくないのですけど……。黒子はそうばやきながら、いまだに初春飾利の頭をもみくちやにしているバカの頭上に、手元の辞書を転位させたのだった。

「ギャブツ!？」

「な、永末さんっ!？」

突然の衝撃に地面に倒れ伏す孝弘。涙目で頭を押さえながらも飾利は彼を心配した。本当、なんて良い子なんだろう。涙出てきた。しかしながら、黒子はそれを冷ややかな目で見ると、優雅に言ったのだった。

「人の話を聞かないからこうなりますの。自業自得ですわ」  
それからふと見た窓の外を、白い鳥が飛んでいった。

しばらくして意識を取り戻した孝弘は、やっとの事で第177支部から抜け出し、寮への道を歩いていた。

「うう、あんまりだ……。首の骨が折れたかと思った。だいたいだな、俺様が死んだらこの小説を読んでくれている皆さんが開始早々の主人公交代で混乱してしまうんだから、もっと優しく扱ってくれよ」

孝弘はブツブツふらふらと道を歩く。大分メタフィクション的な発言だが、ナレーターはこれを見無視する。気にしたら負けである。だから読者諸君も気にしないで欲しい。頼む、お願い、お願いします!

そんなこんなしている中、孝弘がふらふらと覚束ない足取りで歩を進めていく。そして、T字路を左に曲がったその時だった。

ドンッ、と孝弘は誰かにぶつかってしまった。幸い孝弘もその人も大した速さで歩いてた訳ではなかったらしく、こけたりなどはしなかったのだが、孝弘は鼻を強かにぶつけてしまっていた。何処にかというと、その人の頭に。

さて、強か、という表現では、読者諸君もあまり激しい感じを受けないだろう。しかしながら、考えて見てほしい。効果音が『ドンッ』である。ゴツでもガツでもない。ドンッである。

「……クッ、ハ……ッ!」

イタス! テライタスッ! という訳で孝弘は、言葉にならない叫びを上げながら鼻を押さえ悶える事になった。

やはり付いていない。たしかに最初はギャグパートだったからこ  
ういう仕打ちもありだったかもしれないけど、これは違っただろっつ、  
今のはこれから帰って寝るフラグだったろっつ、ギャグ要素なんか無  
かったじゃん、意味ワカンネーヨオ！

孝弘の頭の中ではそんな思考が繰り返り広げられていた。まあ、そん  
なのはナレーターには関係ない。ナレーターはあくまでも状況を第  
三者的に捉え、描写するだけである。

そんなこんなの中、孝弘にぶつかられた方であるその人もまた、  
驚いていた。

「……あア？　なんだア、テメエ」

凶悪な眼光。病的なまでに無機な肌。アルビノのように白い髪。  
そして、独特の発音。

学園都市最強にして、最高峰の演算能力保持者。レベル5の第一  
位『アクセラレータ一方通行』その人であった。

5月11日の午後六時頃、銀行強盗を説得した少年こと永末孝弘  
は、学園都市最強とぶつかった。否、ぶつかってしまったのだった。

？ 梅雨の季節は少しだけ、気分が悪くなるもんで……。

空はまだ明るかった。夏至を一月ちよつと後に控えた今、午後六時といつても空は少し赤みを帯びている程度である。

少し大きさを増した太陽の光を浴びながら、少年は不機嫌そうに歩いていた。昨日と大して変わらない1日だった。『実験』して『実験』して『実験』して……。その『実験』というのは、学園都市の外なら十分に凶悪な犯罪者として全国に報道されるような内容だったけれども、それは既に少年の日常の一部になつてしまっている。大層な感慨もなく、少年は『実験動物』を殺していた。

昨日とほとんど変わらない1日。一方通行、全身に白を塗つたような姿をしたその少年は、若干の苛立たしさを覚えながら道を歩いていた。

この苛立ちが何処から来る物なのかは分からない。実験がいまだに半分程度しか進んでいない事へなのか、それともほぼ半分を終了した今でさえ、大した能力の向上を感じられない事へなのか。はたまた、別の何かからかも知れない。

だが、そんな事はどうでも良かった。『最強』は未だ『無敵』には成っていない。誰にも届かない場所、目指そうとすら思えない高さ。その遙かなる高さへ……。そこに至る事が、至る事だけが、今の少年には重要なものだから。

そのような話はさておき、とりあえず現在、少年は道を歩いていた。反射は今も働いていて、良く良く目を凝らせば、少年の足元で僅かに舞っている砂ぼこりが妙な軌跡を描いているのを見ることができる。

とはいえ、そんな事を街中でするような変人は居ないだろうし、少年の短気な性格からしてもそんな風に凝視されるのを許容出来るとは思えない。そもそも、今はこの道に少年以外の人間はいなかつ

たから、そのような心配はするだけ無駄である。

と、そんな風に歩いていて、少年が丁字路に差し掛かった時であった。

ドンツと何かがぶつかる音と同時に、久しく感じていなかった”痛み”が少年を襲った。

一瞬、僅かな間、思考が止まった。反射は確かに働いていたのだ。少年が無害であると認識したモノ、または、許容したモノ以外は反射の内側に入る事は出来ないはずであった。

しかしながら、何だか分からないが、それは少年の領域へと無断で侵入してきた。それはつまり、少年の『最強』を揺るがしうるモノだという事である。頭部を襲う痛みに苛立ちを募らせながら、少年はぶつかって来たのである。それを睨み付けた。真っ赤な瞳が、鼻を押さえて悶えている男を捉えた。

「……あア？ なんだア、テメエ」

しばらく、といつてもたったの数秒間だけだったが、孝弘の世界は確実に止まっていた。

原因は、正直言うと、ない。なんとなくという訳でもないが、とりあえず、孝弘は数秒の間、思考を放棄していたのである。それから考えた事は以下の通りであった。

……あれ、男？ 女？ ニューハーフ？

なんともまあバカな主人公である。ただ、それも仕方ないと言えば仕方のない事であった。少年、もとい一方通行の性別は、外見からでは判断がつきにくいのである。

反射の弊害と言うべきか、外からの刺激となる物を一切合切まったく受け付けずに何年も生活してきた少年は、ホルモンのバランスがおかしくなってしまうていた。要するに、男だか女だか良く分からない華奢な体つきになってしまったのである。

しかし、そこは我等が主人公永末孝弘。犯罪者を悪口滅多刺しにして改心させる口先は尋常ではないはずだ。ナレーターは、これぐらいの危機なら乗り切れるだろうと高をくくるとする。

と、孝弘が鼻を擦っていた手を降ろした。トナカイさんも真つ青な赤っ鼻になって……はいなかった。

「ええと……」

それから孝弘は言い淀んだ。どうした孝弘、頑張れ孝弘、諦めんな、諦めんなヨオオオ！ と、ナレーターはドコゾの熱血漫画っぽく応援してみる。しかし、ナレーターの応援は届かなかったようだ。代わりのように、一方通行のほうぐ、口を開いた。

「チツ。おい、クソ野郎オ」

「……………」

孝弘はキョロキョロと辺りを見渡した。誰も居なかった。当たり前である。いや、実を言うと分かっているのだ。自分が呼ばれていると言うことは。しかし、元来彼はこういう性格なので仕方ないのである。不良に対してもそんな感じだったし、分かっていただけだと思う。

「テメエだテメエ！ 喧嘩売ってんのか！」

「え？ あ、俺か」

孝弘は今しがた気が付いたと言うように目を丸くした。ム力つくヤツである。一方通行もまた、同様に苛立っていた。ちなみに、同様にというのは変な表現だが、気にはしていない。この小説は所々でナレーターという人格が誕生するのである。

一方通行は脳内で色々なパターンをシミュレーションした。そして、777通りの状況とそのそれぞれに1221通りの受け答えを想定して、最善と思われる対応を取る事にした。

拳を握り、壁にぶつける。要するに、脅しであった。ここは住宅地ではないから、少しくらい破壊した所で問題はない。ただ、余り派手に壊して人が集まるのも面倒だったので、能力を使って穴を空けるだけにしておいた。



孝弘の目が驚きに見開かれるのが分かった。この反応から見るに、自分が一方通行だと言うことは知らないようだ、と少年は思った。「お前、このオレが誰だか分かってんのか？ 学園都市の第一位、一方通こ……」

「マズイ、不味すぎる！ 逃げるぞキミ！」

しかしながら、一方通行にとって予想外な方向に事態は展開していく。なんと孝弘が一方通行の手を握りしめて走り出したのだった。一方通行にとって想定外したのは、孝弘の行動が全くの無意識だったらしい事である。

しかし、今度こそ確認した。この男は反射を突き抜けて触れて来たのだ。

一体、どういう事だア？ こりゃあ。

手を引かれて走りながら、一方通行はそんな事を考えていた。

さて、余談ながら、もしこの映像を、数ヶ月後に誰かが見たとしたら、こう言ったかも知れない。

『アクセラレータが男の人と手を繋いでるんだよっ！ ってミサカはミサカは以下略……！』

ところで、孝弘が走り出したのには深い深あい理由があった。千葉陽子、『伝説の鬼畜数学教師』兼『アンチスキル警備員』の知り合いが、向こうから歩いて来るのが見えたのである。

目の前の華奢な人物と、仮にも空手やボクシングなんかを時間割ラムりとしてこなしている自分。壊れた壁と重ねて見れば、どちらが疑われるかは明白であった。というより、実際、痛いのを我慢すれば孝弘にもあれくらいの事はできる。骨が肉を突き破る痛みを我慢する気概があるのなら、だけれども。

まあ、とりあえず、苦肉の策であったのだった。

それから数分。滅茶苦茶に逃げ回っていた孝弘は公園に駆け込んでから、やっと足を止めた。

心臓は軽い拍動で全身に熱い血を送り続けている。たかだか数分、二時間全力で走らされても生きていられるだけの体力を持っている孝弘にとっては、この程度はウォーミングアップにも成らない。

「ぜえ、ぜえ、も、もう走れねえぜ……」

……嘸。しっかりと運動になっていたようである。と、そこで初めて孝弘は自分が右手で掴んでいる細っこい腕の持ち主を見た。

「よ、よお。ごめんな急に」

苦笑いを浮かべながら、孝弘は控え目に言った。いくら千葉陽子が恐ろしかったからといって、この白い人は彼女を知らないはずである。それなのに急に手を掴んで走り出したら、普通の人だって良い気分はしないだろう。ましてや、こんなに目付きの悪い人ならなおさらである。いくら孝弘と言えど、それくらい心得ていた。

予想通りと言うべきなのか、白い人は下を向いて孝弘が掴んでいた手のひらを睨むように見据えていた。それにしても本当に白い。目も赤いし、もしや、アルビノとかいう体質なのだろうか。だけど、アルビノって確か普通の日光でも肌が火傷するとか何とか……。

と、孝弘はそんな事を考えながらも、機嫌が悪そうな少年に再び声を掛けた。

「あー。お詫びになんか飲み物ぐらい買ってやるよ。何が良……」

「テメエ、なにモンだ」

「……へ？」

「惚けンじゃねエ。どうやってオレの反射を抜けやがったのかって聞いてんだ」

少年が孝弘を睨み付けた。憎々しげなその表情は、目付きの悪さからか、まるで犯罪者のように見える。綺麗な顔してなのに、なんだか残念な奴だ、と孝弘は思った。お前は存在が残念だけだな。ナレーターの呟きは誰にも届かない。

それにしても……。と孝弘は考えた。反射とは一体何の話であるうか。

ここで辞書的な意味を引いてみよう。

？「物理学」光・熱・音などが物の面に当たって、跳ね返ること。

具体例 鏡・山びこ等

？「生理学」刺激に対して無意識に起こる反応。具体例 涙・

瞬き等

この場合はどちらだろう。二つ目のような気がする。きっとこの少年は無意識のうちに他人を拒絶するような反応をしてしまうのだろう。どっかの五ル五が背後に立った人間を無意識にヤっちゃうのと同じようなモンだ。うん、そうだ。そうに違いない。

しかし待てよ。それではこの少年はこれからの人生を灰色のまま過ごしてしまうんじゃないだろうか。それはいけない。何て言うか、人生をそんな風に使ってはイケない気がする。孝弘の人生観からすれば、生きるというのはそれだけで楽しい物でなければ成らない。決して灰色の人生なんか認められないのである。

そんなこんなな思考を、演算能力を総動員する事で物のコンマ数秒で終わらせた孝弘は、いつぞやのあの不幸な少年にしたように、白い少年の手をがっしりと握った。

栄養が足りないのか何なのか分からないが、少年の手は薄く骨張っていた。

「そう気負うなよ。山田」

「あ？ ダレが山田だコラ」

「寂しかったよな。辛かったよな。でも、安心しろ、これからは俺がお前の友達になってやる。大丈夫だぞ、山田」

「だから山田ってダレだ。つうか何言ってるん」

「大丈夫だぞ！ ほら見る！ こうして触ってるのに拒絶反応なんか出てないじゃないか！ 大丈夫だ山田！ お前は人と関わるのが苦手なだけで関われない訳じゃないんだ！ これから一緒に治していこう、なっ？」

「うおおい。こいつ全然話聞いてねえよ。つうか何の話してんだよ」  
少年の言葉を全く聞かず、孝弘はペチャクチャと喋りまくる。はつきりいって迷惑な主人公である。それから孝弘は思い出したように言った。

「あ、そうだ。山田、携帯持ってる？」

「だから山田ってダレだつって……つてメエいつの間に!？」

驚愕の表情を浮かべる少年。その目の前で、孝弘は二つの携帯をポチポチと弄くった。どうやらこの反応からすると孝弘が弄くっている携帯の片方は少年の物らしい。いったいどんな技を使って取ったのだろうか。

呆然とする少年の目の前で、孝弘は他人の携帯だというのに勝手にアドレスを交換しはじめた。

「おうおう山田。なかなか過疎ったセレフォンじゃねえか。アドレスほとんど入ってねーぞ」

「余計なお世話だクソが！ サツサと返さねえとぶつ殺すぞ！」

「ハハハハハ！ 照れるな山田あ！ これでお前さんにも友人が出来たじゃねえかあっ！」

拳を握り振り抜く少年。孝弘はボクシングで培った動体視力でそれをスルリと避けると、高笑いしながらクルクルと回り始めた。

ちなみに、さきの少年のパンチはベクトル操作により人を殺せるだけの威力があったのだが、当たっていない孝弘はそれを知らない。知らぬが仏と言うように、無知な孝弘は精神的にスゴク強かった。

七回ほど回転したところで、孝弘は怒りが沸点に達しそうになっている少年に携帯を投げた。

「そら、返すぜ山田。これから一緒に飯でも食いに……、つてアチヤー。そっぴや、銀行強盗から結局金おろせて無いんだった。仕方ねえか、時間も時間だし、明日にしよう明日。山田！ 明日はハッチャケるぞ！ ハハハハハ！」

「オレは山田じゃねえって、……ダメだっ！ 聞いてやがらねえ！」  
「じゃあな山田。俺様帰ってから色々やらなきゃならない事がある

から、また会おうぜ」

「会うかバカが！」

「メールすつからなっ！」

結局、孝弘は少年の言葉を一度も聞かずに去っていった。そういえば、この間の不幸少年の時もこんな感じだったと思う。前回と違うのは、携帯にアドレスが入っていること位だろうか。これから二人の関係がどんな風に変化していくのか、見物である。と、ナレーターはまだ見ぬ未来に心を踊らせるのだった。

一方通行は妙な気分で立ちすくんでいた。一般人……、だったと思うが、意味の分からない言葉ばかり言いまくるそいつに終始ペースを握られたままで、気が付けば携帯の番号まで交換してしまっている現在。

どうしたものか、考えても答えは出てこなかった。学園都市最高の頭脳も、条件が少なすぎるこの事に関しては答えを弾き出せなかったのだ。

しかし、だからといって無駄だと切り捨てる事も出来ない。何だったのか全く分からなかったが、あの男が自分に触れられる事は確かな事実なのだ。

それは、何度も言うが、一方通行の『最強』を揺るがしうる存在だと言う事である。

「チツ……」

一方通行は舌打ちをして、自宅へと足を向けた。

面倒な事だが、不安要素を残しておく訳にはいかない。次に会った時は危険があるかどうかを調べて、もしもの場合は、歯向かう気が起きない程度に潰しておかなければならない。

一歩一歩ゆつくりと歩を進める。僅かに舞った砂ぼこりが、少年を避けるように不自然な軌道を描く。

一方通行は脳内であれやこれやと試行錯誤しながら進んで行く。少年は気付いていない。心の中にあつた苛立ちに似た感情が無くなっている事。自分のその試行錯誤が、普通の人間が悩む時のそれに酷似している事。少年は、何も、気付いていない。

ふと、一方通行は視線を上げて空を見上げた。古代紫のそれを僅かに濃くしたような深い色と、燃えている蠟燭の煌めきのそれに似た赤い色とが、西と東の空に広がっていた。

一方通行が家に帰りついたとき、携帯電話がピリリリと声を上げた。

永末孝弘と表示されている。一瞬だけ誰かと疑問に感じ、すぐさまあの男だと気付く。本当にメールしてきやがったとそう思い、メールを開く。

『よお山田。明日の昼10時、七学区の駅前な。金はちゃんと持って来いよ』

絵文字も何も無い文章。一方通行はそれを読んで、小さく呟いたのだった。

「山田じゃねエって言ってんだろっが……」

？

『レールガンはレールがあるから【レール】ガンなのであって、レールの

父は、嘘が嫌いな人だった。自分が言わないのは勿論、俺や妹、母にも、嘘をつかせなかった。

嘘をついた人間は、必ず誰かに嘘をつかれる。本当の事を言う人間は、必ず誰かに認めてもらえる。いつになるかは分からないが、真実を叫び続ければ、その声を誰かが聞いてくれる日が、必ず来る。それが父の言い分だった。

けれども、本当の世界は正直者に優しくない。頑固なまでに正直だったせいで、父は苦勞を背負う事が多かった。こじきのような姿の人を見て見ぬフリをする事も、父は自分に対して嘘をつくのと同義だと言って、必ず何か施しをやった。父が持つてくるそういつた苦勞のせいで我が家の家計はあまり良好とは言えなかったけれども、俺はそんな馬鹿正直な父が好きだった。格好良かった。だから、俺も妹も、出来るだけ嘘は吐かないようにしていた。

母はそんな父の愚痴を時折俺たちに溢した。だが、その表情が何処と無く嬉しそうであるのも、俺たちは知っていた。きつと母も、馬鹿正直な父に惚れて一緒になったのだった。

幸せだった。ずっとこんな日々が続けば良いと思っていた。続くのだと思っていた。だけれども、その綻びは、意外にも身近な所にあったのだ。

それが目に見えるほど大きくなったのは、小三の夏休みだった。友達の家遊びに行った、その帰り。俺は我が家の前に小さな影が倒れているのを見つけた。

最初は、犬か何かだと思った。黒っぽかったし、ウンウンと唸っているのが聞こえたから。だけれども、近寄って見て、それが間違いだったと気付いた時には、俺はその傍らに走り寄っていた。

倒れていたのは、妹だった。

「……にい、ちゃん？」

俺が肩を揺すって呼び掛けると、彼女は苦しそうな顔をして言った。焦点がぼやけて、必死に俺を見つめようとしているのが分かった。

「待ってる。父さんと母さんを呼んで来るから、待ってる。良いか？」

力なく頷く妹を見て、得体の知れない何かに身体を飲み込まれていくような感覚がして、俺はすぐさま父と母を呼びに行った。

病院に連れていかれた妹は、すぐに入院する事になった。心臓の病気だと、医者が言った。それから、移植が必要だ、とも。

「何とか、ならないんですか」父が言った。白くなるくらい強く握りしめた拳を、膝の上に乗せていた。

「こればかりは、どうしようもありません。我々では延命が精一杯で……」

医者の答えに、父が歯を強く噛み締めた。それからしばらくは、時計の秒針だけが音を立てていた。母は妹の側に付き添っているから此処には居なかつたし、俺は馬鹿みたいに圧倒されているだけで、何も出来なかつたから。

「家には、金が無いんです」

父が言った。余りにも淡泊なその言葉に、俺は一瞬、父は妹が大事ではないのかと思つた。しかし、握りしめていた手のひらから赤い筋が流れるのを見て、俺はその淡泊さの裏に、燃え上がるような悔しさを見た。身体が、その炎に焼かれたように熱くなった。

医者は少し黙って、口を開いた。

「例え移植が無理だつたとしても、出来るだけ早期に施設の調つた病院へ移す必要があります。この病院では、もしもの時に対応できません」

「どこが良いんですか」

「幾つかありますが、移動期間も含めて考えると、郡馬大医院が良いでしょうね。紹介状を書いておきますから、家族と話し合つて、決めてください」



「……分かりました。ありがとうございます」

父は頭を下げてそう言った。俺は父に背中を押されるようにして、その部屋から出た。

廊下を歩いてロビーに出ると、父は柱を殴った。ガンツと鈍い音がして、父の拳から血が流れた。看護師の人達も遠目に見るだけで止めようとはしなかった。俺もまた、言い知れない悔しさに唇を噛んだまま、父を見つめていた。

「孝弘、母さんの所に行こう」

父は拳を洗って血を流すと、俺に言った。妹の病室は三階にあった。階段を感情を抑えるようにゆっくりと登り、病室の前に着くと、父は深く息を吐いた。

扉を開けて中に入ると、明るい声が聞こえて来た。母と妹がこちらに気付いて、会話を止めた。

「来ちゃったね。お母さん」

「ほんとう、噂をすればってヤツかしら」

顔を見合せてクスクスと笑いあう二人に、俺は唐突に叫びたくなかった。しかし、父が俺を睨み付けて、俺は押し黙った。言うてはいけないと、その目が語っていた。

そんな俺たちに不穏な空気を感じたのだろうか。母が似合わない苦笑を浮かべながら、口を開いた。

「なあに？ 初めての病院で緊張でもしちゃったの？」

黙ったままでいる俺の代わりに、父が答えた。

「さあな。良く分からん」

父はベッドの方に近づくと、妹の頭を撫でた。気持ち良さそうに目を細める彼女の顔を見て、俺は何故かとても苦しく感じた。おかしいのは俺の心臓じゃあないのに、今にも潰れてしまいそうだった。「ねえ。お父さん。わたし、何時お家に帰れるの？」

妹が不意に発したその質問に、父の動きが止まった。ギリギリ不自然でない間だったが、俺には父が一瞬だけ苦しそうに眉を歪めたのが分かった。

「う……ん。そうだな。先生が言うには、もっと大きな病院じゃないと治せないらしい。群馬県の方に引越さないといけないかもしれないんだ」

「えー？ 引越しい？ イヤだよ、そんなの。先生はなんて言ったの？」

妹の澁刺なまでに明るい声が針のように父を刺していくのが分かった。

そして、父が嘘をついた。大したことはない。簡単な手術をすれば治るんだが、その機械がこの病院にはない。加えて、お金が無いからもうちょっと待っててくれないか。そんな嘘だった。優しい、どこまでも優しいウソ。

「うえー。お金とわたしのどっちが大事なの？」

何も知らない妹は、そんな言葉を不満そうに吐き出した。父はただ、ゴメンと謝って、薄く笑った。それが、俺が父のウソを見た、最初で最後の日だった。

孝弘は唐突に目を覚ました。嫌になるほど頭が冴えていて、どうやら二度寝も出来そうにない。ただ、身体は妙に重かった。

起き上がるのは面倒だが、このままじゃ時間の無駄遣いだ。そう考えて、孝弘はノソノソとベッドから降りた。何時ものようにシーツをたたみ、長方形にしてベッドの上に並べて置くと、孝弘はカーテンを開けた。高い位置から照らす太陽の光が、ベランダを照らしている。

孝弘は爽やかな初夏の空気を胸いっぱい吸い込んで

「……あれ？」

首を傾げた。そして、現状を確認する。異様にパツチリと冴えた頭、そのくせ妙に重たい身体、極めつけに、高い位置から照らす太陽。これは多分、そう言う事だと思つ。

孝弘はギギギギと鈍い音を上げながら首を回して、壁に掛かっている時計を盗み見た。10時3分。昨日自分で決めた約束の時間を、既に過ぎていた。

「ね、寝すぎたぁー!!」

孝弘は絶叫に近い声を上げて、洗面所へと駆け込んだ。

学園都市第七学区駅前。

「クヒヤヒヤ。……あのヤロー、オンモシレーじゃねエか」

その駅の正面入り口で白髪の少年は笑みを浮かべて立っていた。

時刻は10時18分。

時計の秒針と共に苛立ちが募っていく。一方通行は足下の石をコ

アクセラレータ

ツンと蹴飛ばし、ベクトル操作によってそれを目前に浮遊させた。

念動力のようにも見えるが、その実はもっと恐ろしい代物である。

少なくとも、物理学的には。

「永末孝弘つつたか？ あのクソ野郎、そんなに死にてエなら、殺してやるよ。ちゃんとな」

小さな声で物騒な事を呟く白髪少年こと一方通行。周囲の人々もまた、その空気を感ずり取ってか、彼から距離を取るようになら歩いていく。一方通行が再び時計を見ようとした。と、その時だった。

「マアツダアアー!!」

遙か前方からそんな叫び声が聞こえてきた。昨日聞いた、あのクソ野郎の声である。一方通行は抑え込んでいた怒りを暴発させた。

「遅すぎだア! このクソバカがア!!」

浮いている小石を全力で殴り飛ばすと、まるで弾丸のようにそれは飛んでいった。

「ソゲブツ!？」

遠くの方で、そんな声が聞こえた。

「酷いぞ松田。死ぬかと思ったじゃないか」

「ダレが松田だボケ。てエか何で無傷なんだよお前。直撃だっただろっが」

「フザケルナア！ 撃つならボク以外のヤツを撃てえ！ そこにいるソイツラだ！」

「……お前、頭おかしいんじゃない？」

「失礼な、頭がおかしいんじゃない。心を病んでるだけだ！」

「……あア。成る程な」

「あれ？ 納得しちやったの？ 冗談なんだけど。おーい」

それからしばらく、快復した孝弘は白髪の少年と一緒にファミリーストラン、俗称ファミレスに足を踏み入れていた。

ところで、これは完全な余談であるが、学園都市のファミレスとは『ファミリーストラン』ではないと孝弘は思っている。何故なら『ファミリー』で来ないからだ。というより、学園都市に『ファミリー』がいる人の方が少ないと思う。兄弟が居る人間を除けば、だいたいの方は友達としか来ないだろうし、それを考えると、『ファミリーストラン』じゃなくて『フレンドレストラン』にすべきだななどと考えていたりする。まあ、フレレスなんて気持ち悪い語呂は使いたくないから、教育理事会にももの申したりはしないけれど……。

とりあえず、そんな事はおいておく事にしよう。朝食も取らずに走ってきた孝弘としては、さっさと昼飯を食らって空腹を満たしてしまいたい。

店員が置いていったお冷やにちよつと口をつけて、孝弘はメニューを開いた。

「まあ良いや。松田、とりあえず何か頼もう。腹ペコだ」

「松田じゃねエって言ってるだろうが。殺すぞ」

「ンー、チキンかポークか。迷うなあ。あ、松田はどっちが良いと思う？ ちなみにビーフなんかもあるけど」

「ダメだっ、やっぱり聞いてやがらねエ！」

頭を掻きむしる一方通行。彼の知り合いがこの姿を見たらなんと  
言うだろうか。とりあえず、驚く事だけは想像に難くないと思う。  
そうこうしていると、孝弘が音を立てて品書きを閉じた。

「ヨシッ。決めた。とりあえず全部頼もう！」

それから数十分、一方通行はいつぞやのファミレス店員のような  
驚愕の視線を孝弘に向ける事になる。まあ、どうでも良い話である。

「よし、じゃあ次行くか」

一時間ほどして、ようやく食事を終えファミレスから出た孝弘は、  
グツと伸びをして言った。

「あア？ 次だア？」

「おうよ。松田はゲーセンって行った事あったりする？」

「松田じゃねエつつつてんだろがカス。ねエよ」

「そうか。よしよし、じゃあ先ずはそこ行こう」

孝弘は上機嫌で一方通行の肩に腕を乗せて歩き出した。会って二  
日目の人間にそんな事が出来るなんて、こいつ、メンタルが強いと  
か馴れ馴れしいとか、そういう次元を超越している。

一方通行もやはり、当然のように自分に触れてくる孝弘に困惑を  
覚えずにはいられなかった。能力を無効化している感じではない。

それならば出会い頭にぶつけた小石の勢いも殺せていたはずである。  
それに、反射が今もちゃんと働いているのは、確認済みだ。

チツ。分からねエなア。妙に馴れ馴れしいコイツの思考も、全っ  
然分からねエ。コイツ、何がしたいんだ？

感じるはずのない重みを肩に感じながら、一方通行は自分より何  
センチか高い所にある孝弘の顔を横目に見上げた。

ニコニコと、本当に嬉しそうな顔をしている。今に鼻歌でも歌い  
出しそうな雰囲気だ。

……全っ然、分かんねエ。

一方通行は心の中で呟く。ただ不思議と、嫌な気分にはならな  
かった。まあ、なっていたら孝弘は今頃地面に埋没してしまっていた

だろうけれど。

何分か歩いて到着したゲームセンターはいつもより盛況のようだった。当然である。本日は日曜、加えてここは学園都市だ。高位能力者ならともかく、趣味で使える奨学金の額に限りのある学生は必然的に近場の娯楽施設に集まるのだ。まあ、高位能力者に分類されるくせにここに来ていた奴も何名か居るわけだが、それは置いておこう。

孝弘はどこかに空いているゲームはないかとそこら辺を歩いてみた。人気所のクレーンゲームには小学生から高校生まで色々な年代の人が集まっている。まあ、どちらかというと女性の比率が高い。プリクラは言うに及ばずだが、あえて黄色い声が聞こえてくるとだけ言っておこう。

と、ちよつと奥に入った所で二人プレイ用のシューティングゲームが空いているのを見つけた。次々出てくるゾンビを撃ち殺していく、まあ、在り来たりなゲームである。

「おっ。空いてんじゃん。おい松田、あれやろうぜ」

「ああ？ ふざけんなよ。何でオレがこんなちやちイゲームに興じなきゃ……」

「まあまあ。俺様のテクニクに任せりゃあ一発よ。ちよつと見てろって」

孝弘は言いながらコインを投入した。ゲームが始まる。孝弘は真っ直ぐに銃を構え、飛び出てくるだろうゾンビを撃とうと……。

「……ア、アルレエー？」

結果だけを先に述べると、孝弘は開始十秒で撃沈した。仕方ないと言えばまあ、仕方ないと取れなくもない。ゾンビ十五体に囲まれてスタートなんて、とんだ無理ゲーである。

「ははアン。俺のテクニクに任せりゃ一発ねエ。確かにまともに当たったのは一発だけだったな」

鼻で笑う一方通行。孝弘は余りの恥ずかしさに項垂れた……りは

しなかった。仮にも彼は打たれ強さが売りの肉体再生能力者である。やられつぱなしでは居られないのだ。

……と、言う訳で、ワンコイン投入。再び現れるゾンビ。そして、やはり物の十数秒で孝弘は沈んだ。

「おお、三秒延びたじゃねエか。良かったな」

またも鼻で笑う一方通行。孝弘の肩がフルフルと震えだした。

「上等じゃー！ この永末孝弘さまを怒らせたこと後悔するが良いわあ！ 俺様の式丁拳銃が火を吹くぜコンチクショー！」

こうして孝弘は数千円を無駄にすることになった。結局一面もクリアできなかったわけだが、その隣でケラケラと笑う一方通行の姿をたかだか数千円で見られたのは、きつと凄じいことなのであった。まあ、孝弘にしてみればただの無駄遣いだったのだが、それは言わぬが花という奴なのかもしれない。

「何か良いことでもあったのですか、と、ミサカは心のうちの若干の疑問をぶつけてみます」

ある研究所の一室。そこに、二つの影があつた。先ほど声を発したのとは別の白い少年は、昼、孝弘と居た一方通行だった。

「あんだア？ ンなこと聞いてどうする」

「いえ、別に何も。ただ、時折思ひ出したように笑う一方通行が珍しかっただけです。と、ミサカは深い意味が無いことを説明します」  
少女の姿をした誰かが言った。一方通行は少し考えて、口を開いた。

「……ふん。大した事じゃ無エ。ちよつと面白え奴に会っただけだ」  
「そうですか。第九二八七次実験開始まであと3分です。所定の位置に着いてください、とミサカは実験開始の時間が迫っている事を告げます」

聞きたいことはそれだけだと言わんばかりに、少女が言う。一方

通行は少しだけ気分が重くなるのを感じた。原因は、良く分からなかった。

「……おい、欠陥品」

「なんですか、とミサカは移動しない一方通行に少し苛立ちながら返事をします」

「お前らは、死ぬのが怖くねエのか」

ふっと、音が消えた。少女の顔に初めて表情らしき物が浮かんだ。とはいえ、少し目の開き方が大きくなって、パチパチと瞬きをしただけだったから、ずっと見ているも気づけたかどうかは微妙なところだ。

応えない少女に、一方通行は場を取り繕うように立ち上がった。

「まア？ お前らが怖がるうが何しようが知ったこっちゃ無エし、怖いっつって泣き叫んだ所で、結局は殺すんだがな」

もともとの決められた位置に歩く。この実験の事をアイツが知ったらどう思うのか、そんな事を考えながら。そうして、一方通行が足をとめた時、少女の方が口を開いた。

「ミサカはいくらでも代えの効く模造品です。死ぬこと自体に恐怖はありません、とミサカは正直に答えます」

抑揚のない声と言う。一方通行は一層気分が悪くなるのを感じた。自分が望んでいた答えがどんな物だったのかは分からないが、これでは無いことは確かだったようだ。苛立たしさを感じながら振り向き、吐き捨てようとした。

「そうかよ。ンじゃあ、さっさと殺し……」

「ただ……」

しかしながら、一方通行はその先を言う事が出来なかった。少女がまっすぐに自分を見つめていた。

「ただ、例え恐怖を覚えたとしても、ミサカたちがこの実験から逃れることは出来ないでしょう、とミサカは告げます。ミサカネットワークが存在し、上位個体が研究者側にある以上は、ミサカたちに行動の自由はありません」



一方通行の中の苛立ちが急速にしぼんでいった。代わりに、別の黒々とした何かが胸を満たそうとしていた。憤怒のような、憎悪のような、はたまた別の何かのような。

その正体がもう少して掴めると、そう思った時、少女の方がそれを邪魔するように言った。

「五月十二日、時刻は日本標準時午後七時三十分ジャスト。これより第九二八七次実験を開始します」

少女は宣言すると同時に、大きなゴーグルのような物を被った。小さな始動音を立てて、それがほのかに光を帯びた。

？

原則的に肉体再生は脳の破損は再生できない。何故なら能力自体が脳の動

孝弘は走っていた。長い道だった。持てる体力を総動員し、ほぼ全力疾走に近い速度で、孝弘は走っていた。

募る焦燥感に胸が焦がれるような気がした。もつと速く、もつと速く。そうして足を進めるけれど、臨界点ギリギリまで追い詰められた身体は拒絶するようにスピードを上げてくれない。

クソツ、クソツ！ 孝弘は心の中で叱咤し、それでも足を進めた。息が上がって気道が痛いのは我慢した。膝が笑いそうになったのも、必死で耐えた。

玉のような汗と言えば聞こえは良いが、全身を水のように流れていく汗は正直快いモノではない。しかし、鼻筋を伝っていくそれを拭う事もせず、孝弘は走った。

体力の限界もすぐそのようだった。目も霞んで来ているし、何より、道が歪んで見える。孝弘にはそれがとても長く見えた。長い……、この道はいつたい何処まで続くのだろう。もういつそ、このまま倒れてしまった方が楽かもしれない……。

弱音が心を揺さぶる。それでも孝弘は走った。せめて、走れる間は走ろう。せめて、進める間は進もう。孝弘は歪む道を見ないようにして目を閉じた。瞼に危うげに乗っていた汗が目に入って、少しだけ痛くなった。それから何秒走っただろうか。もうどれくらい進んだのかも分からなくなった時、意識がふっと、薄れてしまった。

限界を超えて酷使した体が堪えきれなくなったらしい。あつと思つた時、孝弘は倒れていた。もう、動けなかった。動かしていたのは足のはずなのに、手の指さえ動かせそうに無かった。死ぬほど体がだるい。このまま眠ろうと、そう思つた時。

「永末孝弘、2時間09分34秒47！」

誰かの叫ぶ声が聞こえた。聞き終わつた瞬間、孝弘は眠気が吹き飛ばのを感じた。目を開けて、倒れたまま空を仰ぐ。清々しいくら

いに青い空だった。そして、ふつふつと喜びが沸いてきた。

目じりを、涙のように汗が伝う。孝弘は喉の痛みも忘れて、大声で怒鳴った。

「どうだー！ このクソツタレババアがあー！」

快晴の空にどこまでもその声は響いた。直後、張った糸が切れるように、孝弘は気を失った。

それから約三時間後。孝弘はジャージのまま保健室のベッドの上に居た。

ちなみに先ほどの孝弘の時間割とでも言うべきフルマラソンである。ついでに言つとくと、日本の学生レコードが2時間08分12秒であるから、彼の記録は普通に考えて凄まじいものである。高校生としては異例の記録だったりする。

しかしながら、孝弘はそのような誇るべき記録を出しているながら、現在全くもってそれを喜べる状態に無かった。彼はただ冷や汗を流しながら、眼前で丸椅子に座っている鬼畜数学教師こと千葉陽子に引きつった笑みを見せるだけである。

その孝弘の笑顔とは打って変わって素晴らしい笑顔のをぞかせる千葉陽子。彼女は孝弘の顔をしっかりと見つめながら言った。

「なあ永末、面白い話を聞いたんだが、どっかの誰かがゴール早々ババアとか何とか叫んだというのは本当か？」

「ハハハハハ、いや俺ゴールしてからすぐぶっ倒れちゃって、その後のこと記憶にないんすよね」

白を切る孝弘。無茶である。だいたい、マラソンしていたのは孝弘だけだったのだから、これはもうあれである。袋のネズミ。なんてったって、確信した上で聞いているのだから。

千葉陽子がさらに笑みを深くして、口を開いた。

「ほう、そうかそうか。なんでもその生徒は高校生にしては快拳ともいうべき2時間09分34秒という記録を出した永末孝弘という名前らしいんだが、全く知らないか」

「ハハハハハ。心当たりありませんね。誰すかそいつ」

「貴様だろうがこのオタンコナス！」

「アデツ！？」

孝弘は額を押さえて悶えた。というのも、千葉陽子が孝弘に向けてチヨークを投げつけたからだだった。なぜチヨークを常備しているのか、それは聞いてはいけない。きっと深い理由があるのである。

それから痛みに悶える孝弘を見て、千葉陽子はふうとため息をつき、優しい笑みを浮かべた。ちなみに、孝弘は文字通り悶えているので、その様子は目に入っていない。彼女はまるで別人のように優しい声音で言った。

「……まあ、何はともあれだ。2時間09分34秒。素晴らしい記録じゃないか。永末、良くやったぞ」

ところで、孝弘のこのタイムは正式記録として採用される事はなかったりする。その理由は、彼が強能力者だからだ。電撃使い、風力使い、発火能力者、空間移動能力者、そのどれもが一定以上のレベルになると能力を移動に応用できる。それと同じように、理論上肉体疲労も回復するはずの肉体再生能力はたとえ低レベルだったとしてもスポーツでは一般人として扱われない。能力が世界に広まったなら話は変わってくるかもしれないが、あいにく学園都市の学生と何処かに居るだろう『原石』の人間しかこれらのもんでもパワーは使えないのが現状である。まあ、肉体疲労のとれない孝弘としては、まずこの時間割自体が無用の長物なのだが、それはまあ良いだろう。

「……とりあえず、今日の授業はもう終わってしまったから、適当に休んでから職員室に來い。授業の欠席は、過度な能力の使用で倒れたとでもしておいてやる」

千葉陽子はそう告げて、孝弘の頭をワシワシと撫でた。ちなみに、孝弘が肉体疲労を再生できないという事実を、彼女は知っていたりする。何故知っているのか、それは孝弘の能力強化担当が彼女だからだ。

孝弘の学園には大能力者が居ない。公式記録での大能力者は、何年前かの卒業生が最後だ。学園側としては、それはちよつとばかり良くない事だったりする。大した名門だという訳でもないが、それでも、良い成績を残したいというのは学校の総意である。

そして、この学園都市では、高能力を保持している事がステータスと言つても過言ではない。しかしながら、高位な能力を持った人間がこのような平凡な高校に来るはずもない。それこそ、特待やら何やらで名門に引き抜かれていくだろう。孝弘の学園はそれに逆らえるだけの力が無かった。良くも悪くも、平凡な学校であつただ。

とすると、残された道は数えるほどしかなかった。名門に対抗して特待制度を設けるか、はたまた特殊なカリキュラムを構築するかだがこれはやはり無理があつた。何しろ、名門には金があるのだ。根性や気迫云々が漫画や小説の世界ではモノを言つたりするが、現実問題、金は大抵のモノを黙らせる力を持っている。研究にも、金は入り用だ。

そうした経緯から、結局のところ、学校は『将来有望な生徒』に対して個別指導を行うだけになつた。つまりは、在籍する強能力者に一人ずつ教師を割り当てたのだつた。当初は費用の問題が議論されたそうだが、たつた十数人しかいない強能力者に一人当てたところで、そう経費がかさむ訳もない。そして、この中から大能力者が出たらめつけ物、そんな感覚だつた。

高校入学最初の身体検査でレベル3判定を受けた孝弘も、学校のそのような方針に付き合わされている。とはいえ、孝弘の能力開発が成果を發揮する兆しは、今のところ全くなかつた。

本当に肉体再生能力なのかも怪しい物だと孝弘も千葉陽子も内心思っている。しかし、警備員として学園都市の裏の気配を僅かながらに感じている彼女は、それを上に報告していない。孝弘がどう思つかはさておいて、大切な教え子がドコゾの『研究所』でボロボロにされるといふ未来が、彼女には受け入れられなかつたのだ。

まあ、こんな話をいくら続けたところで、状況が先に進む訳ではない。とりあえず、話を元に戻そう。

孝弘の頭をぶつきらぼうに撫でた千葉陽子。その彼女はもう保健室には居らず、残されたのは孝弘と、あとは新品のチョコクだけであつた。

「拾つていこうよ。ねえ」

額を強襲したそれを恨めしげに見据えながら、孝弘は小さくため息を溢した。それから、両手で右足を揉んでみる。

だるさはまだ残っていたが、歩けないというほどではない。千葉陽子の言う通りに少し休んでから行くのも良いかもしれないけれど、そうする位ならさっさと帰って寝てしまった方が良くように思われた。

それにそろそろ、定期試験の時期である。来週の月曜日から火水木。金曜日には身体検査も待ち構えている。最近はやボリがちだったから勉強もしないといけないし、やることは沢山あつた。

まあ、何はともあれとりあえず、目下のところは、帰宅を優先すべきだろう。孝弘はよっこらしよと言いながらベッドを降りた。積もった疲労から膝が崩れそうになったが、何とか堪えた。

「ヤバいなあ。この分じゃあ明日の朝起きれそうにありませんよ。だいたいマラソンを2時間15分以内に走り切れてのが無茶振りなんだっつーのコンチクショー」

ブツブツと言いながらそこへんの物を支えにして孝弘は保健室の入口まで歩いた。

先の発言についてだが、これの説明には少し時間を遡らなければならぬ。というのも、それにはカリキュラム開始前の千葉陽子との会話が関係しているからである。まあ長々と説明するのも面倒なので、バツパと終わらせよう。その会話というのは、以下の通りである。

『そういえば永末、最近このマラソンはマンネリ化してつまらな

いとは思わないか？」

「は？ いや、そうっすかね。俺的には中々キツイんですけど」

「そうだろう。キツサも中途半端だよな」

「……。あれ？」 中々”の捉えかたが違う気がするの俺だけかな」

「もつとキツクした方が良いか？」

「はい？ いや、結構です」

「そうかそうか。キツクしても大丈夫か」

「……。ん？」 結構”の捉えかたも違うような……。あの、千葉さーん、聞いてますかあー？」

「そうだな……。よし永末。今日は135分以内で走れ。さもなければ、オロス」

「……俺今まで2時間40分くらいしか出した事ないんだけど。ていうか、あれ？ 俺一回もOKとか言っていないよね？ 言っただけ、いや言っていないよ」

「大丈夫だ永末。お前なら出来る！ じゃあ早速……、スタートオ！」

「え？ マジで？ これマジで？ 本気で？」

……以上。まあ、この教師あつてのこの主人公というか、人の話をほとんど聞いていない所なんかはそっくりである。そういう訳で、孝弘はぶっ倒れて気絶するくらい必死に走ったのであった。

だいたい、オロスという表現は曖昧だと思う。大方思い浮かべるのは大根おろしとかそこら辺だが、人間でそんなことしたら大変である。それこそ「スプラッタ」だ。

グチャグチャの赤いモザイク必須な斬新かつ刺激的なアートに、「元・永末孝弘」なんて書かれた看板が立てられていたのかもしれない。ヒヤッホー、なんて前衛的。

そんな不吉な想像をしながら、孝弘は保健室を出た。時刻は午後5時少し前。部活動をしている生徒と、他にはテスト前の居残り学

習をしている希少種な真面目ちゃん達以外、もう学校には生徒はいない。

来月からは三年生の受験対策課外とかいう物が始まるらしいので、その頃になればこの時間帯にもう人がほとんど居ない、なんて事は無くなるだろう。しかし、とりあえず今は保健室前の廊下を歩いているような生徒は居なかった。

孝弘は生まれたての小鹿のそれよりも頼りなく感じられる足で無人の廊下をゆつくりと進む。疲労骨折やらは流石に起こさないとと思うが、どうにも自信が無くなる重さだった。

結構な時間を掛けて孝弘はやつと職員室についた。ほつと息をつく。それからチラツと服を見て大した乱れが無いことを確認すると、ノックをして扉を開き、入室の際のお決まりの文句を言った。奥の方で千葉陽子の長い髪が揺れた。

「おお永末、もう来たのか。早かったな。まあ良い、とりあえず入って来い」

「ういー」

気怠げな返事をしてノソノソと千葉陽子の所へ行く。といつても、今の孝弘にはこれ以上のスピードは出せそうにない。実質的最高速度である。千葉陽子もそれを分かっているのか、文句を言う気配はなかった。

「お前、歩くの遅いぞ」

……訂正。文句言った。

「う、ウルヘーっ。俺だつて好きでノロノロ歩いてる訳じゃねーやいっ！」

「あーはいはい。分かったから怒鳴るな。唾が飛ぶ。とりあえず、ほら、お前の荷物だ。まとめておいてやった」

千葉陽子は机の上に置いてあった鞆と制服を孝弘に渡した。そういえば、孝弘は未だにジャージである。描写は二度目だが、読者の皆さんは多分覚えていないだろうから念の為、とナレーターはここぞとばかりに優しさをアピールする。



受けとった孝弘はというと、特に何も考えている様子は無かった。強いてあげれば早く帰りたいとか、その程度だが、まあ、諸君も先生に呼ばれて職員室に入った時、だいたいは意味のない事を考えている物だと思う。

千葉陽子はそれから、彼女の机をガサゴソと漁って、一枚のプリントを引っ張り出した。

「なんすか、それ」

孝弘が聞くと、千葉陽子はニヤリと笑った。どこかで見た笑み、どこで見たんだったか。千葉陽子は意地の悪そうな笑みをそのままに、プリントを持ち上げた。

「これか？ なに、大した物じゃあないさ。ただ、まあ……そうだな。今日のお前のマラソンでレベルの向上らしき物が見受けられたから私の給料が上がる、その報告用紙みたいな物さ。永末、今日は本当に良く頑張ったな」

千葉陽子はプリントを恍惚とした表情で見つめてから、またニヤリと笑って孝弘に視線を戻した。

あ、分かった。こりゃああれだ。入学してすぐ見たあの笑い方だ。そんな時もたしか給料が上がるって喜んでたような……。

「まあ、これからも宜しく頼むぞ、永末孝弘くん？」

孝弘は思った。マラソンは多分これ以上は肉体的に無理だろうから、次は何だろう。三階級上のプロボクサーと殴り合ったり、まさか、ノーロープバンジーとか……？

「死ねってのかコンチクショー！」

ブワツと涙が飛び出てきて、孝弘は足の疲れも忘れて走り出した。結局世の中金なのだ。そんな悲しい現実を目の当たりにした一日だった。

一度寮に帰り、孝弘は筋肉痛の予防も兼ねて軽いランニングをす

ることにした。

外に出ると、重い雲が垂れ込めているのが分かった。天気予報ではたしか、今日はまだ雨は降らないという。今にも降り出しそうに思えるが、降らないと言ったら降らないのだろう。

最近の天気予報はもう予報の域を越えていると言っても良い。樹リーダイヤアグラム形図の設計者なんて化け物じみた機械、良くもまあ造れた物だ。

孝弘はそんな事を考えながら膝を大きく上げて歩いてきた。こうすることで普段はあまり使わない太ももの筋肉を刺激することが出来る。ちよつとした準備運動のようなものだ。

それから屈伸をして、孝弘はようやく走り出した。足の裏で大地を捉え、指でしっかりと地面を掴む。正しいランニングの仕方は知らないが、空手やボクシングの移動方法が身体に染み付いたせいで、孝弘は走る時もっぱらこのようにしていた。

十数分ほど走って、孝弘は少し息が上がってきたのを感じた。まあ、今日は流すだけだからこれくらいで良いだろう。そうして走るのをやめて、孝弘は辺りを見渡した。いつの間にか、結構なところまで来ていたようだった。といつても、寮までは歩いて30分もしないだろう。とりあえず、向かいにあるコンビニで飲み物でも買おう。

と、そう思った所で孝弘は見覚えのある少女がそこにいるのを見つけた。花飾りを頭に乗せた少女。あんな個性的なアクセサリーは他にないだろうと、そう思わせる奇抜なチヨイス。言わずもがな、黒子に虐められる孝弘のオアシス、初春飾利その人であった。

時折携帯を確認したり、左右を見回したりと誰かを待っているようだ。孝弘はとりあえず、声を掛けてみる事にした。左右から車が来ていないことを確認して道路を渡る。

まだこちらに気づいていないだろう可愛らしい少女に見えるように手を挙げて、声を出した。

「ヨッ、カザリン。こんな所で何して……」

しかしながら、孝弘は言葉を言い切ることが出来なかった。声を掛けられてこちらを向いた初春飾利、彼女のスカートが、スカートが

「うゝいゝはゝるゝっ!」

「……ふえっ?」

「あ、水玉模様……」

「……ふえっ? はれっ? えっ?」

「おーおー。今日もちゃんと履いてるね、感心感心。ってどしたの初春」

「き、き……っ」

「きき? 誰それ」

「キヤアアアー!!」

孝弘は後にこの事をこう振り返る。

『世の中には、俺様の予想を斜め上に飛び越えていく人間が居るらしいぜ。っていうか、街中でスカートめくりってどうよ。見ちゃっても仕方ないよね、不可抗力だよ。なのにさ、叩くのってちょっと理不尽じゃない? まあ、女の子だからそういう気分になるのも分からなくはないけどさ、すんごく痛かったんだけど』

？

『おいこら能力者ども！キサマラのせいでエネルギー保存の法則はしっ

××××年×月×日

妹が入院して、一月が経った。俺は家族と離れ離れになった。今は学園都市に居る。ここは、上手くいけば、ほとんど『無料<sup>タダ</sup>』で生きていけるらしい。

父さんが済まないと言った。母さんが泣いていた。良く分からないフリをして、俺は笑っていた。不思議と辛くはなかった。きつと皆、妹を死なせたくないのだと、知っていたから。ただ、迎いの車に一人で乗っている時、何故か無駄に息が詰まって苦しかった。泣いては……いなかったと思う。

初春飾利と佐天涙子は親友である。まだ学園都市に来て間もないころ、初等部で知り合ってから、二人はすぐに仲良くなった。その出会いには何らドラマティックな物はなかったし、仲良くなった切っ掛けもそう大した物ではなかった。例えば、席が隣同士になったとか、その程度の他愛ない物だった。

ただ、親元を離れての生活が、近い誰かへの依存を増長させやすいのも確かである。さびしい時に電話をかけた時、大した用もないのに待ち合わせをしたり、二人は次第に、互いの中で親友という位置づけを確立していった。

出会う前にそのような存在が居なかったのかという疑問は残るが、親友とは得てしてそのような物である。一目見て言葉を交わした瞬間に友となる人もいれば、長い時間を掛けて少しずつ友情を育む人間もいる。今回は、この二人の友情の作り方がうまく噛み合った、ただそれだけの事だった。

いや、まあ、それが妙な方へ方向転換して、スカートめくりが始

まるなんて言うのは、さすがに予想外だったけれども……。

「ねえ、ごめんったら初春。このとおりっ」

頭を下げてくる親友に、飾利はつんと横を向いて返した。頬っぺたが少し膨らんでいて、いかにも私怒ってますという雰囲気であるが、正直言つて迫力にかける。その膨らんだ頬を押したらさぞかし小気味よく『ぶ〜』と音が鳴るだろうな、と孝弘はそんな事を思った。

ところで、孝弘の左頬には真つ赤な紅葉が散っていた。さっきの事件で引っぱたかれた痕である。本当なら一瞬でこんなもの消えるはずだが、そこはギャグ体質、面白いなら傷を消すだけじゃなく残す事も出来るらしい。イラン体質だ。呪いか、呪いなのかこれは。

だいたい、あれは不可抗力だったのだと孝弘は思う。この世に生きていて、誰があんな知りあいに声を掛けようとしたら突然スカートが天に向かつて伸びあがって、その下の可愛らしいパンツを目にしてしまうなんて 状況を想定できるだろうか。とりあえず、街中でスカートめくりをする人間がいる、という妄想をしている時点で「病院行って来い」と言われかねない。

本当なら今頃は飲み物片手にオウチに帰っているはずなんだけどもなあ、と孝弘は思考を飛ばした。

『よっ、カザリン。偶然だね』

『あれ、永末さん。何してるんですか？ こんなところで』

『ん？ いやあ、ちよつと運動。これから帰ろうと思ってただけど、カザリンは？』

『えと……、ちよつと友達と待ち合わせしてるんです』

『ふうん。ま、あんま遅くならないように帰りなさいよ、じゃあね』  
『はい。さよならです』

こんな当たり障りのない会話をして別れるはずだった、はずだったのだ。しかし、やんぬるかな、現実とは非情なものである。少なくとも、何にもしていないのにピンタを食らうくらいには。

さて、少々視点変わって、初春飾利という少女の目から先の件を

見てみよう。孝弘に言い分があるように、彼女にも彼女なりの主張があった。

初春飾利、花も恥じらう中学一年生である。スリーサイズは75・58・76。ちよつとお腹回りが気にな……ったりはしない。うん、まだ大丈夫、大丈夫つたら大丈夫、問題ない。

たとえ身長に十センチ近く開きがある親友の佐天涙子と同じウエストだとしても、それなのに胸の大きさが五センチ位違ったとしても、まだ中学一年生、成長の余地はある。無いとは言わせない。まだ大きくなれるはずだ。……いや、お腹は大きくなられても困るんだけどね。

とりあえず、そんなお年頃の少女にとって、パンツを見られるということははつきり言って一大事であった。しかも相手が、知りあってそんなに経っていない、ちよつと見知った程度の他人。

もし彼女の能力が精神感応系だったら、彼女は迷わずその力を使ってこの男の記憶を弄っていただろう。残念ながら、彼女の『保温サーマルの手』ではそんな事出来ないけれど。

親友のスカートめくりはもはや常習化していて、そのうち止めてくれるだろうと放置していた分、いまさら叩いたりして関係が悪くなるのは嫌だったし、だからといって何もしないでパンツを見られた屈辱を忘れることなんてできないお年頃である。まあ、そんなこんなで、結局は孝弘を引っぱたく事に落ち着いたのだった。

しかし、彼女はそこらの中坊よりも数段賢く、また、心根の優しい少女でもあった。

いくら人様の下着を見てその柄を口に出して言うようなサイテーな男が相手だったとしても、今回この男が悪くないのは理解できていたし、理解していながら叩いた事が謝罪すべき事柄だということもちゃんと分かっていた。謝らないといけない。だって、この人は悪くないんだから……。

飾利は頬を膨らまし、親友の佐天涙子にそっぽを向きながら、孝弘に視線をやった。

ポケットとした表情。いったい何処を見ているのか全く分からない阿呆面。仮にも女の子のパンツを見たんだから、それなりの対応をしてくれても良いと思うのは自分だけだろうか。

なんか、謝りたくなくなりました……。そうですよ、私は被害者なんです。別に謝らなくなたって良いじゃないですか。だいたい、永末さんは女の子に対して失礼過ぎます。ここはもう、責任取って今日の晩御飯おごって貰うしかありません。

飾利は決心した。この失礼な、というかマナーが丸つきり為っていない男に、教育的指導をするのだ、と。

幸いすぐそこにファミレスも有ることだし、申し訳ないけども佐天さんには先に帰ってもらおう。そうと決まれば善は急げである。

無視し続けたせい、視界の隅で佐天涙子が涙目になっているのが分かった。初春う、と力無い声が聞こえるが、やはり無視だ。彼女は今、とても怒っているのである。

飾利は孝弘の目の前に立って彼の顔をしっかりと見据えた。身長差があるせいで自然と見上げる形になる。しかし、孝弘は又ポーズとした表情をして、心ここに非ずといった感じにあらぬ一点を見続けている。しばらく待ってみたが、帰ってくる気配はない。

「……ああもうっ、永末さん！」

孝弘を睨みつけていた飾利だったが、埒が開かないと思ったのか、結局怒鳴る事にした。

ようやく孝弘の目がこちらを向いた。一体何を考えていたのか知らないが、こつもあからさまに無視されるのは良い気分ではない。

……あれ？ とか言いながら、私も佐天さんに同じことしてる？  
一瞬だけそんな事を考えたけれども、飾利はすぐさまその考えを振り払った。

違う違う、これは佐天さんが余りにも言うことを聞いてくれないから、やむを得ずこつしているだけなのだ。いや、でも無視してるのには変わりない訳で……。

飾利はチラリと涙子の顔を覗き見た。泣きそうな表情で、指をさ

迷わせている。凄く罪悪感が刺激される表情である。いけない、これはクリティカルで母性的な何かを刺激してくる。

飾利はすぐさま視線を戻して孝弘の顔を見上げた。男のくせに、線の細い輪郭。間違いなく美形と呼ぶしかないムカつく顔がそこにあった。

なんかもう、色々ありすぎて飾利は涙腺を込み上げて来るものがあるのを感じた。

涙子に対する罪悪感とか、無視ばかりする孝弘への怒りとか、どこかからやって来た悔しさとか……。パンツを見られたというパニックに乗じるように処理容量を越えた感情が一気に飾利を襲う。

そして、溢れた感情を持って余したまま、飾利はそれら全てをぶつけるように孝弘に怒鳴った。

「責任を取って下さいっ！」

「はっ、はいい!？」

叱られた少年のような返事をする孝弘が、飾利には少し苛立たしかった。

さてさて、諸君は世の中に誤解という言葉があるのをご存知だろうか。誤解、それは読んで字の如く、ある事柄を誤った意味で解釈する事である。

一番分かりやすい例でいくと、確信犯などはどうだろう。ちまたでは良く『わざと何かをする人』という意味で取られがちのこの言葉だが、少し知識のある人はこれが誤りである事を知っている。正しくは『自己の正当性を信じた上で行う犯罪』の事である。

他にも、小春日和は初冬でしか使つてはいけない言葉であるし、天地無用も、ひっくり返しちゃダメなのである。知っている人間に言わせれば、誤った意味で使用している人間は『アイタタタ、ちょっと君、間違つてる間違つてる。勉強してきなさい』なのであるが、



しかし、残念なことにこれらの言葉ははつきり言って学ぶ機会が少ない。なぜなら、本当の意味を知ってる人も知らない人も、常識として使用するからである。だから、意味を誤解しているAさんと、しっかり理解しているBさんの間でも、会話が成り立ったりするのだ。

長々と続けてしまったが、まあようするに、誤解という物は訂正しない限りそのまま突っ走っていく物なのである。

「ダッ、ダメエエー！」

「わひゃっ。さ、佐天さん!？」

気がつくと、佐天涙子は叫びながら親友の腰に抱き着いていた。彼女の身長の方が何センチも高いはずなのに、まるで子供が母親に縋り付くかのような体勢である。

涙子は頭上で困惑の声を上げる親友に、涙を流しながら叫んだ。

白梅の花を模した髪飾りがチラリと光を反射する。

「ダメだよ初春っ！ パンツ見られた位でそんな事、絶対にダメだよぉー！」

涙子は知っていた。この親友がどこまでも優しく、強い責任感を持ち、そして、純真であることを。

初等部で知りあつてから、はや数年の月日が過ぎた。どこか抜けたところのある彼女が放っておけなくて付き合い始め、いつのまにか、涙子の中で彼女の存在は半身と呼んでも過言では無いほど大きくなつてしまつている。

けれども彼女はいつのまにか風紀委員ジャッジメントにまでなつてしまった。人の安全を守る力を持つ親友を誇りに思いながら、自分の知らない人間関係を築いていく半身に言い知れない焦燥感も覚えた。

それが何に対する焦りなのかは分からない。半身が離れていく事への恐怖から来る物なのか、それとも他の何かからなのか。今日は

こんな事がありました、と、顔を輝かせながら教えてくれる彼女に、自分の無力さを突き付けられるような気分になる事もあった。

スカートを不意打ちでめくったりして、それでも涙目になって抗議するだけの飾利を見ては、涙子は彼女がまだ自分から離れてはいかないのだと確かめていた。

……まあ、最近その中に、いわゆる『弄りがい』というのを見つけて、スカートめくりが楽しくなってきたのは否定しない。

否定はしない、しないけど！ ていうか出来ないけどつ、私は初春にこんなことしてもらいたかつた訳じゃナアアア！

心の叫びを表すように、涙子は飾利の腰を抱きしめる力を強くした。女性的な柔らかい感触が服越しに感じられる。

「はあううつ。佐天さん、い、痛いですよ」

困惑を含んだ声が頭の上でそう言う。だが、ここで力を緩める訳にはいかなかった。何故なら、きつと親友の少女も、離される事を望んでいないだろうから。

涙子の脳裏に、親友の告白が蘇る。自分が何を言っても聞こえず、おもむろに男の人の前に立って、まるで葛藤を押し殺すような仕種をしていた彼女。彼女はそれから一度だけ自分を見て、言ったのだ。

『責任を取って下さい』

それは傍目から見ても明らか告白だった。みさおを捧げた男に対する、古風な告白の言葉だった。ただ一つ、涙を瞳一杯に滲ませる言う彼女の顔に浮かぶ、苦しみの感情を除けば……。

涙子は知っていた。この親友がどこまでも優しく、強い責任感を持ち、そして、純真であることを。妙に頑固な事や、耳年増だった事、お気に入りパンツには少女趣味な物が多いって事も、涙子は知っていた。自分を説明するよりも、初春の事を紹介する方が楽なくらいだった。そして、だからこそ、涙子は手を離せない。

この純真すぎる少女を、こんな事で『嫁に行かせる』わけには、いかないのだから……。

一方、孝弘の脳みそはキュルキュルと高速回転をしていた。考えている事は一つ。責任とは何かについてである。まあ、これは状況的にパンツを見てしまった事であろうが、孝弘は涙子の様子を見て何かとんでもない事をされるのではないかと考えた。

なにしろ、涙を流しながら腰に抱き着いてまで阻止する何かである。それはきつと、世にも恐ろしい何かなのであった。

孝弘は考えた。どうすればそれを回避できるか。今の彼には大した持ち合わせはなかった。普通の生活を送るには十分な奨学金を貰ってはいたが、食事では殆ど潰れてしまっている。今の孝弘は、ちよつと財布に余裕のある学生と大差なかった。高い物で機嫌を直して貰う事は出来そうにない。せいぜい、食べ物で驕るのが関の山である。

孝弘は辺りをキョロキョロと見渡した。ちよつと、ファミレスが目に入った。あそこなら、いくら食べられてもそう高くはならないだろう。学園都市の食事関係は懐に優しい。

内心で頷いてから、孝弘はまだに抱き合いながら騒いでいる二人に向き直った。腰に抱き着いている結構なプロポーションの少女はとりあえずそのままにして、孝弘は初春飾利の肩をがっしりと掴む。

「カザリン、まああれだ。とりあえず、あそこで話そう。な？」

指差した先にあるファミレスを見てコクコクと頷く飾利に、孝弘は笑顔を顔面に貼付けるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4499v/>

---

とある虚弱な絶対空間

2011年10月2日03時32分発行